

BC 州内陸部日系人収容所跡旅行記

大木 崇

目次

2022 年 9 月 6 日（火曜）セント・アルバートからゴールデン

[9月7日](#)（水曜）ゴールデンからニュー・デンバー

[9月8日](#)（木曜）スローカン、ベイ・ファーム、ポポフ、スローカン、レモンクリーク、
ニュー・デンバー

[9月9日](#)（金曜）サンドン、カスロー

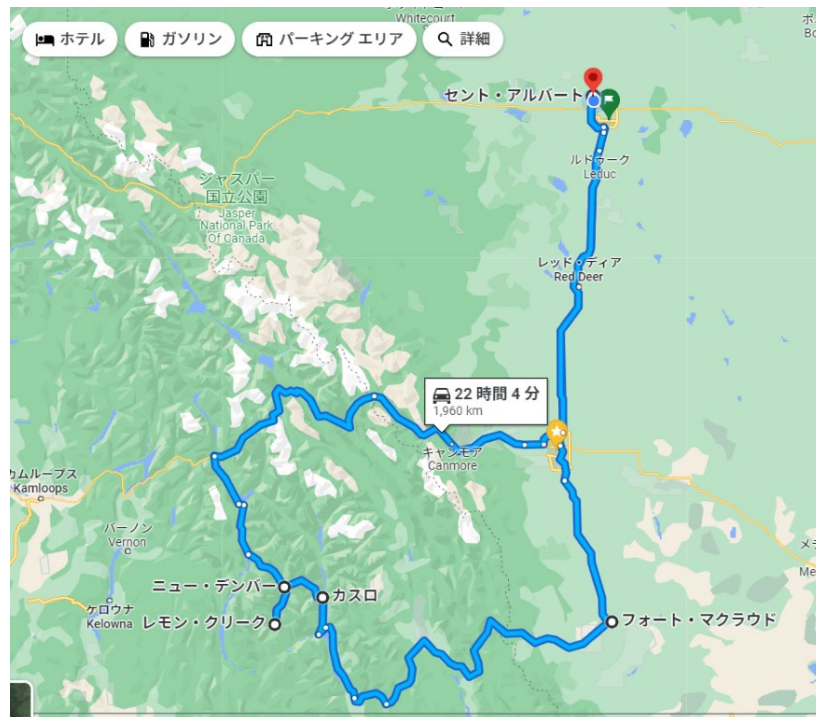
[9月10日](#)（土曜）快晴、朝 6 度、午後 26 度

[9月11日](#)（日曜）ファーニーからセント・アルバート

9 月 6 日（火曜）セント・アルバートからゴールデン

快晴、朝摂氏 10 度、午後摂氏 21 度

これは 2022 年 9 月 6 日から 11 日まで、BC 州内陸部の日系人収容所跡（Rosebery, New Denver, Bay Farm, Popoff, Slokan, Lemon Creek, Sandon, Kaslo ; ロースベリー、ニュー・デンバー、ベイ・ファーム、ポポフ、スローカン、レモン・クリーク、サンドン、カスロー）をドライブ旅行した時の旅行記です。それぞれの日系人収容所のあった場所の歴史的背景、収容所施設跡、現状について書き記します。



9月6日午前8時にセント・アルバートの自宅を出発。3時間半、320キロ南下してカルガリーに到着。セント・アルバータ周辺はカナダ大平原の一部であるが、針葉樹に落葉樹が交じる森と、平たい所に雨水の溜まった浅い沼が多く、地形的には湖地区（Lake Land）と呼ばれる。農地では主に小麦と菜種が栽培されている。菜種の花の咲く6月には菜種の黄色と小麦の緑が地平線まで続く。現在は菜種も小麦も既に収穫が終わり、農地には鋤込みを待つ薄茶色の茎だけが残る。カルガリーに近づくに連れて雨量が少なくなり、自然林が少なく、乾いた大地が続く。カルガリーからカナダ横断道路を西に走る。カナデアン・ロッキーの山岳地帯に入り、観光地バンフ、レイク・ルイズに向かう。バンフ近くの公園で昼食をとり、更に山岳地帯を西にゴールドデンに向かう。カルガリーからゴールドデンは265キロ、午後4時に到着。

ゴールドデンからクーテネイの谷間を南下して米国に通じる道路があり、ここは交通の要衝になっている。人口4,000人余りで宿泊施設とレストランも多い。近年、観光に力を入れているようで町の中心地区は美化されている。交通の要衝のためか宿泊料金は夏の観光シーズンのこともあり高い。[（目次に戻る）](#)

9月7日（水曜日）ゴールドデンからニュー・デンバー

午前曇り、午後晴れ、朝摂氏5度、午後摂氏13度

朝7時に起床し、町のパン屋で昼食用のサンドイッチを購入した後、カナダ横断道路をレベルストーク（Revelstoke）まで西に行き、そこからコロンビア河に沿ってニュー・デンバーまで300キロを南下する。コロンビア河はレベルストークからナクスプ（Nakusp）までは、川幅が広く湖のようになっている。ナクスプの町から東に15キロ谷川に沿った道を入った所にナクスプ温泉（Nakusp Hot Springs）がある。



露天の温泉プールは大きくて温いプールに小さくて熱い（42度）プールが付いている。入湯料はシニア（65才以上）は10ドルであった。

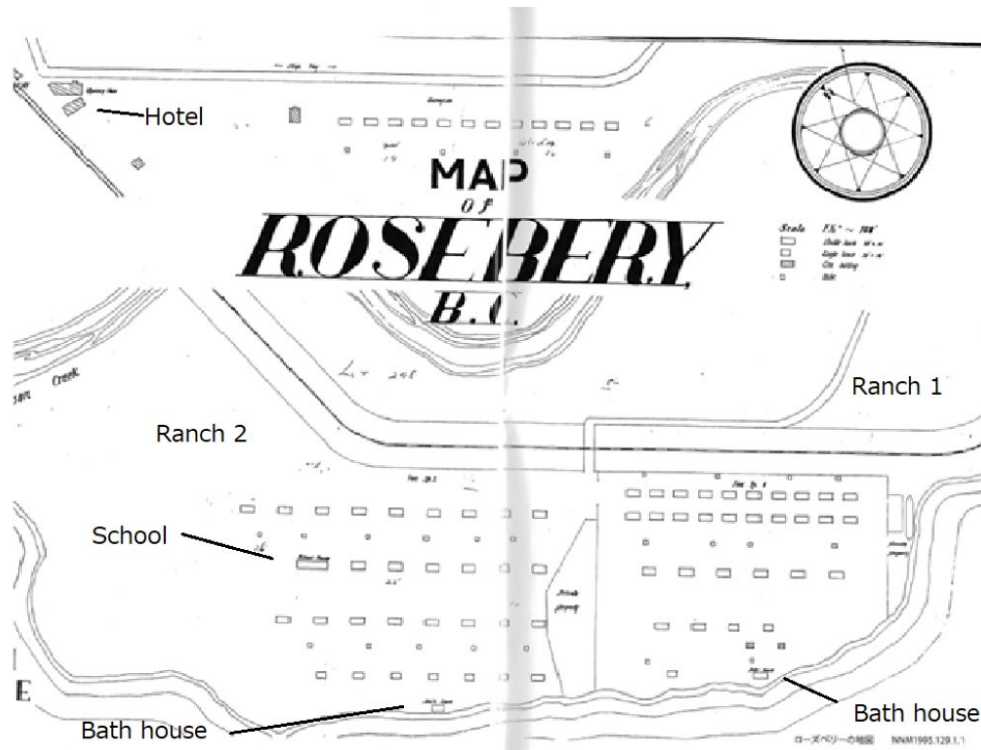
ナクスプからBC州ハイウェイ6号線は二つに別れ、まっすぐ南下するものと、東に分かれてスローカンの谷間に入るものになる。我々はスローカンの谷間に行く道を40キロ走り、ニュー・デンバーの北6キロのローズベリー（Rosebery）に到着する。

ローズベリー・キャンプ (Rosebery Camp)

ローズベリー・キャンプはニュー・デンバーの北6キロの、陸がスローカン湖に丸く半島のように突き出た場所に設営された。1890年代にスローカン湖の蒸気船とフェリーが発着する棧橋があり、サンドンとナカspbを結ぶ鉄道の途中駅として開発された。当時は客車も走っていたが1933年に廃止された。

もとフェリーの棧橋があった湖岸の開けた土地に、BC州保安委員会 (BCSC) が簡易住宅60戸余りを作り、1942年秋、日系人356名が移動して来た。大部分は日本国籍保持者であった。スローカン・バレーの日系人キャンプでは一番規模が小さかった。キャンプは東西二つに分かれ、牧場1 (Ranch 1)、牧場2 (Ranch 2) と呼ばれた。BCSCの事務所が牧場1にあり、簡易住宅を利用した学校が牧場2にあった。また両方の牧場に共同浴場が設置されていた。小川を挟んでキャンプの北側に白人の小さな集落があり、食料雑貨店、ホテルが一つがあった。また、小川とキャンプの間に鉄道路線があり海岸のフェリー発着所まで伸びていた。

ローズベリーへの入り口は Rosebery Unincorporated の標識が建っているだけなので、最初は見落としてしまい、湖岸の道路を引き返してきて見つけた。現在、牧場1の東端は海岸のフェリー発着所まで草原になっているが、牧場1の西側と牧場2は林になっている、林の中に家が10数戸点在している。住宅地を車で回ったが人影は見えず、静かな避暑地、引退者の住宅地の風情であった。どこにも、ここが日系人キャンプであったことを示す標識はなかった。



1942年のローズベリー・キャンプの見取り図。小さいな四角は小さな簡易住宅 (4.8メートルx4.8メートル)、大きな四角は大きな簡易住宅 (4.8メートルx7.2メートル) を示す。上部の小川とキャンプの間に鉄道路線が走っている。



現在のローズベリーの航空写真。白線で囲まれた部分がローズベリー・キャンプ跡。東の端をのぞいて林になっていて、林の中にいくつかの住宅が見える。



ローズベリー 1943年 NNMイズミ・コレクション

1943年のローズベリー・キャンプの東端、鉄道がフェリーターミナル近くに停車している。



現在のローズベリー、フェリーターミナルのあった場所。

ローズベリーの思い出

メアリー・キタガワの思い出

私たちは1942年冬にヘイスティングス・パークからポポフ、ベイ・ファーム、そしてスローカンに移動しました。ポポフでは小さなテントでもう一家族と一緒に生活しました。それまでであったことのない家族でしたから、私はとても居心地が悪かったです。テント生活をしているうちに雪が降ってきました。食事は食堂で他の人と一緒でした。トイレは家の外に作られていて共同で使用しました。

私たちは1943年1月までテントで暮らし、それからローズベリーに移動しました。しかし、ローズベリーの簡易住宅はまだ完全には出来上がっていませんでした。ローズベリーには外側をタール紙で覆われた簡易住宅が何列も並んでいました。どの家もタール紙が貼ってあるので真っ黒でした。家の暖房は薪のダルマストーブと調理用の薪ストーブだけでした。簡易住宅は4.8メートル×7.2メートルで両側に寝室があり、真ん中は台所兼居間でした。この台所兼居間は狭いので家族は交代で食事をしました。

私は2016年頃記録映画に出演するためにニュー・デンバーの日系人収容所記念センターにいきました。ここには簡易住宅が保存してあります。しかし、わたしは入り口に立ったままで中に入るのをためらいました。両親がこのような住宅でどんなに苦労したか分かってしまうとおもったからです。しかし、私は映画の撮影があるのを思い出して中に入りました。中は私が想像していたよりずっと小さかったです。家の両側の寝室のベッドは2x4建材で作られていました。しかし、ここに保存してある簡易住宅にはいろいろと修繕が施されていました。私達の住んでいた簡易住宅はもっと原始的なものでした。

イクヨ・ウチダの思い出

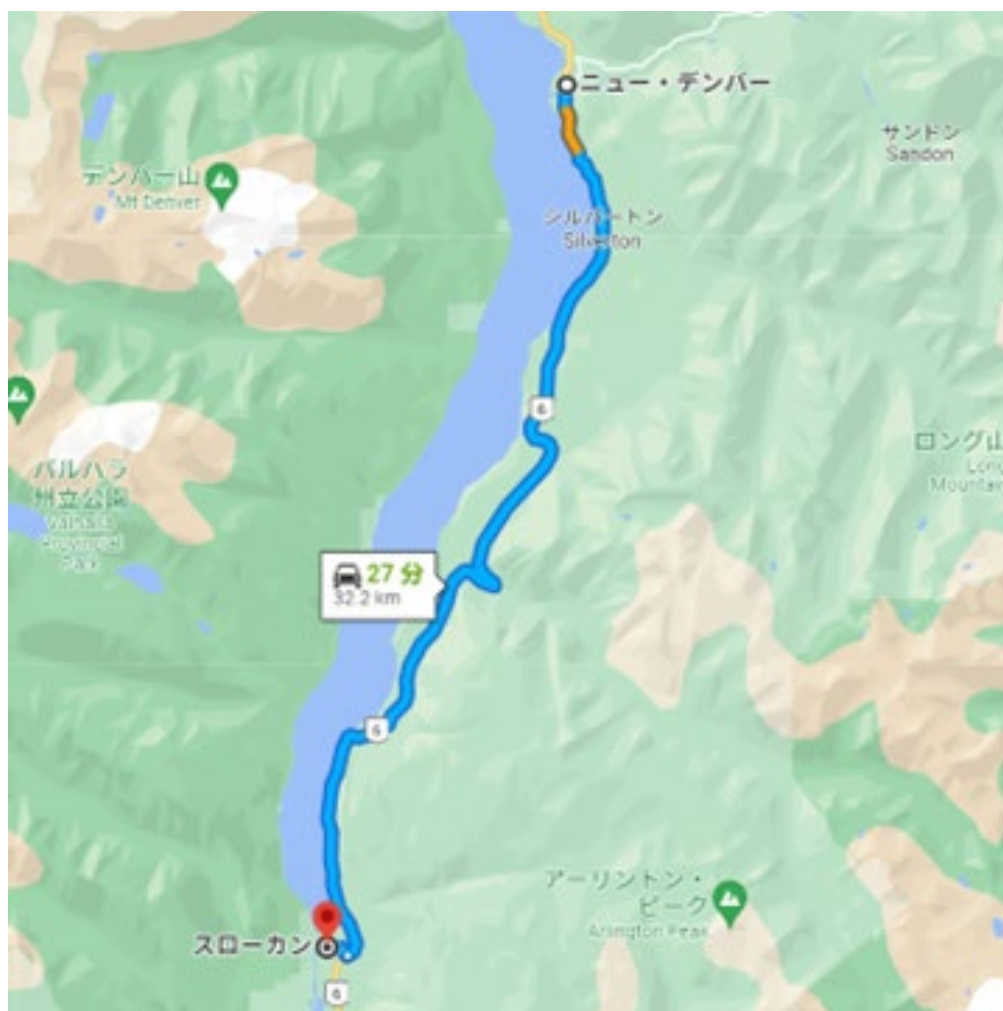
ローズベリー・キャンプは原始的でした。電気もなく上水道もありませんでした。水は近くの小川から棒の両端にバケツをつけたもので汲んで家まで運びました。薪は若い男の子が家に配達してくれました。鉄道の枕木を細く割って焚付けに使いました。薪は生木なのでストーブの後ろに立てかけて乾かしました。それでもなかなか燃えませんでした。

この日はニュー・デンバーのバハラホテル（The Valhalla Inn）に泊まる。[（目次に戻る）](#)

9月8日（木曜）スローカン、ベイ・ファーム、ポポフ、スローカン、レモン・クリーク、ニュー・デンバー

快晴、朝摂氏 10 度、午後摂氏 25 度

今日の予定はスローカン、ベイ・ファーム、ポポフ、レモン・クリーク、ニュー・デンバーのキャンプ跡である。



ニュー・デンバーからスローカン湖東岸に沿って走る。道路は湖から 50 メートルほど上の崖の上をくねくねと続く。時速制限は 80 キロだが曲がり角では 40 キロに落ちる。交通量は少なく、行き交う車は稀である。ただし、この景観が良く、交通量が少なく、曲がり角の多い道路はオートバイ愛好家に人気があるようだ。一人、または数人のグループで走るオートバイによく出会う。町のコーヒー店で止まっているオートバイグループを見ると、半数以上が引退した夫婦のように思える。オートバイはホンダ・ゴールドウイングという大型が目立つ。

ニュー・デンバーからスローカンまで 32 キロを 30 分ほどで走る。ハイウェイから町に入る標識ははっきりしていた。町は縦横に幅の広い道路が通り、整然と区画整理がしてある。自然発生した町ではなく、企画をして造成した町であることがわかる。しかし、現在は建物、住居がとても少なく、道幅が広だけ閑散としている。先ずは昼食をとれるところを探す。かつて町の中心であったハロルド・ストリートとティレニュー・アベニューの角近くに小さなスナックを見つける。トーストサンドイッチがとても美味しいので、夕食用のサンドイッチも買う。若い女性の店員に聞くと、義母と一緒に店をしている、6 年前に BC 州の沿岸から引っ越しきたという。Flaca's Bakery and Bistro という店で、家に帰ってから調べるとインターネットにいくつも良い評判が載っていた。

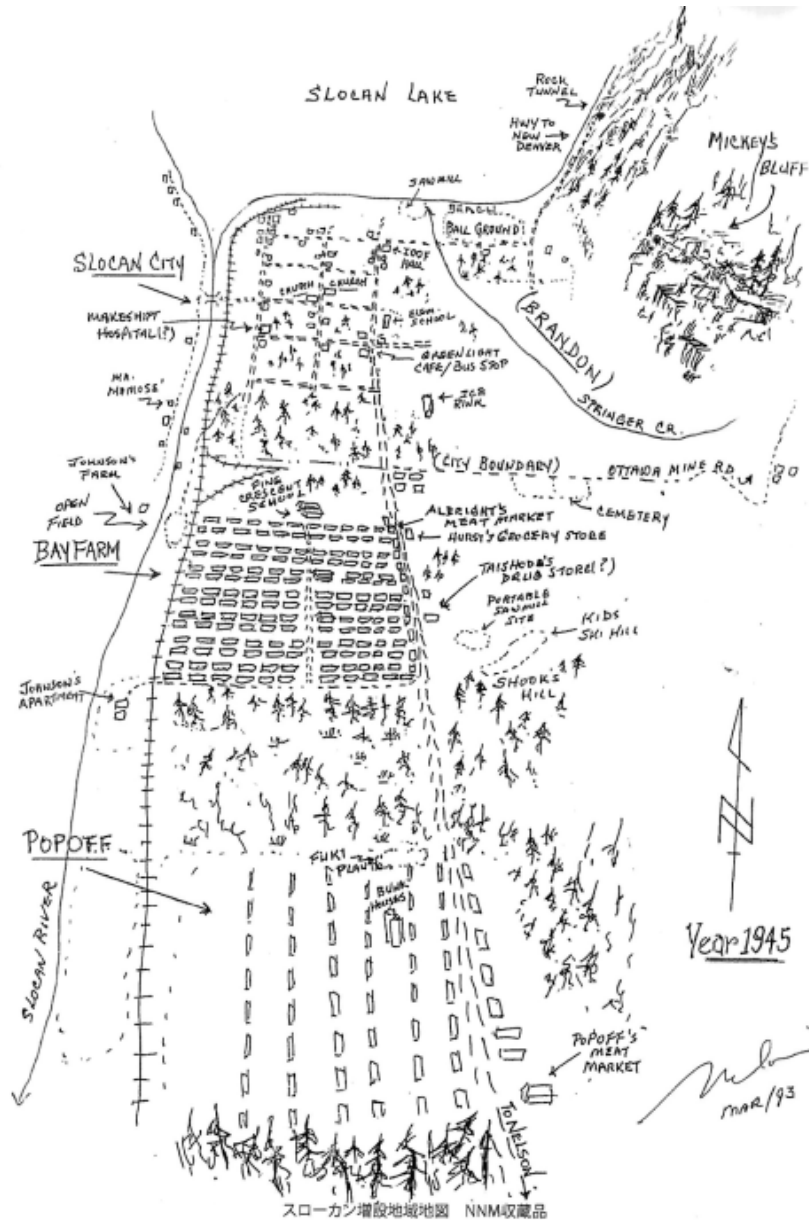


スローカンのスナック

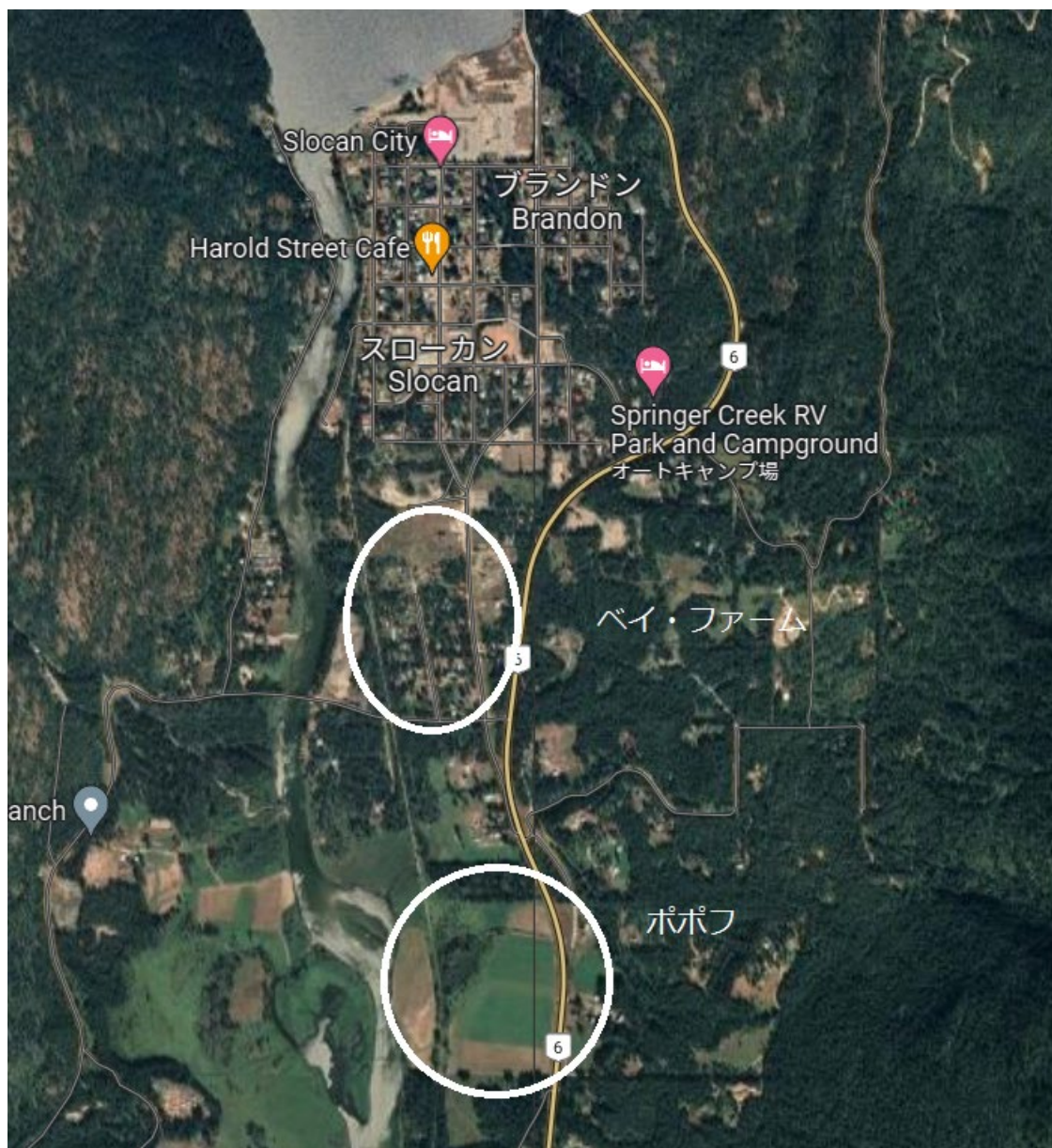
スローカン・シティー（通常は単にスローカンと呼ばれる）はスローカン湖の南端に蒸気船とフェリーの発着所として開発された。1890 年代に周囲の山で次々に金、銀、鉛、亜鉛、銅、カドニウム、カドニウムの鉱石が発見され、周辺の鉱山から鉱石をスローカンに集積してカナダ太平洋鉄道に乗せた。またスローカン湖の蒸気船の発着所でもあった。1900 年には 12 のホテルがあった。しかし、1900 年代半ばに鉱石が底を付き鉱山開発ブームは終焉する。町の人口も減少し、1931 年には 202 人、1941 年には 177 人になった。

BCSCはスローカンの空き家となった建物を借り受けてキャンプにすることにした。また、スローカンのすぐ南にある農地ベイ・ファーム（Bay Farm）とPopoff牧草地（Popoff）を借りて簡易住宅を建設してキャンプにすることにした。

1942年夏から日系人がバンクーバーから列車でスローカンに到着を始め、ここからスローカン・バレーの数カ所のキャンプとサンドン（Sandon）のキャンプにトラックで移動した。スローカンには鉱山で栄えた時代のホテル、公共建築、鉱山労働者住宅が残っていて、日系人はこれらの建物を修復して住んだ。1942年末までにスローカンの日系人は595人になった。1945年から1946年にかけて、スローカンはスローカン・バレーの日系人の内、日本へ追放される人の集積地になった。



1942年当時のスローカン、ベイ・ファーム、ポポフキャンプの見取り図



現在のスローカン、ベイ・ファーム、ポポフの航空写真



1897年のスローカン、蒸気船の発着所からハロルド・ストリートを眺める。手前に鉄道線路が建設中であるのがわかる。ここがCRPのターミル駅になる。



1942年 列車でスローカン・シティの到着した日系人。ここでトラックに乗り換えてサンドン、ローズベリー、ニュー・デンバー、ベイ・ファーム、ポポフ、レモンクリークに向かった。



1946年 日本へ追放される日系人がスローカン・シティーでバンクーバー行きの列車に乗る

スローカン・シティ BC州 1942年頃 NNM1996.170.16.1.15



1942年頃のスローカン。 Harold Street からスローカン湖を見る。大通りの先に貨車が止まっているのが見える。



現在のハロルド・ストリート、スローカン湖方向を眺める。現在のカナダ退役軍人会第 276 号支部は、1923 年にオッドフェロウ・ホールとして建設され、日系人収容所時代にはスローカン・バレーの集会所として使用された。

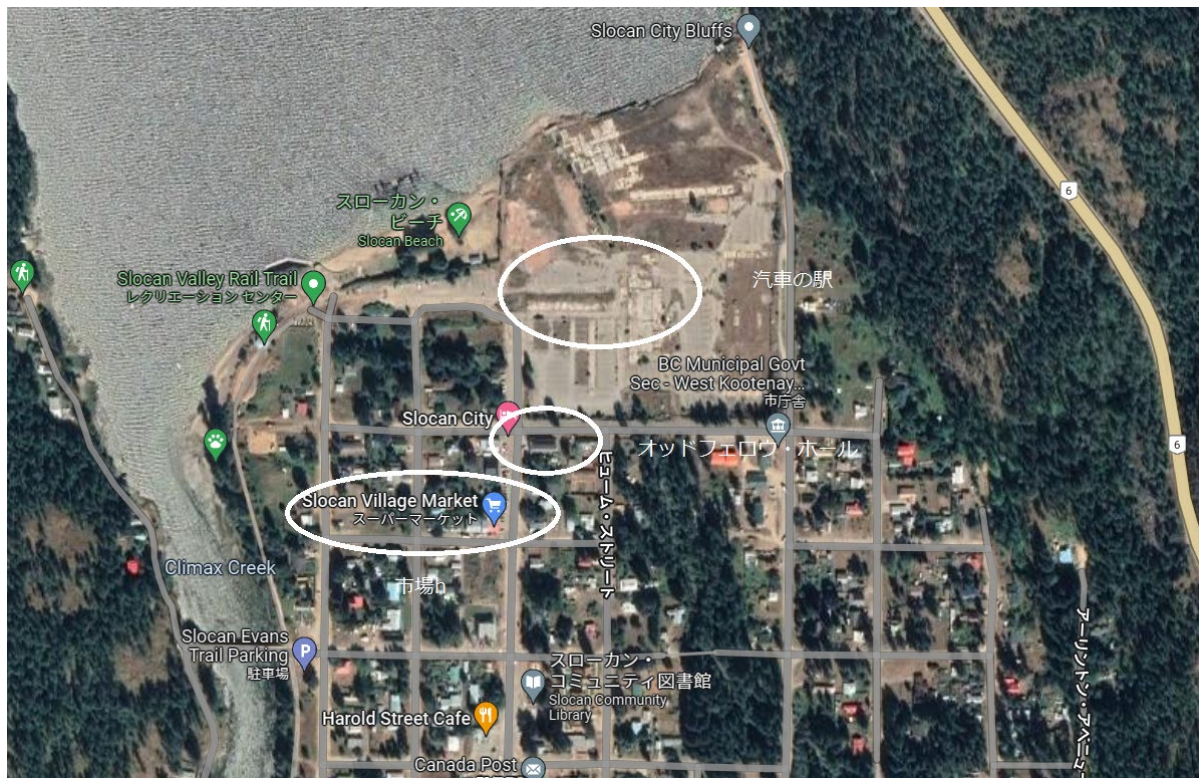
現在、1942 年当時の建物で残っているのは上記のオッドフェロウ・ホール（修繕されている）とスローカン・バレー市場（Slocan Valley Market）だけである。



オッドフェロウ・ホール



現在のスローカン・バレー市場（Slocan Valley Market）は収容所時代にはポポフ市場と呼ばれた。この場所に1952年スローカンのゼンイチ・キノシタ氏が息子でマニトバで建築の勉強をしていたジェームズ・キノシタが設計した近代的な現在の建物を建てた。そしてしばらくの間、キノ市場（Kino's Market）と呼ばれた。



1942 当時の建物と汽車の駅の跡地



CPR 駅の後はコンクリートの床だけが残っている。



CPR 駅の北側はスローカン湖を望む公園になっていて、公園の西端から CPR の線路を撤去したあとがハイキング、自転車旅行用の砂利道（Slocan Valley Trail）になっていてネルソン（Nelson）近くまで南に 50 キロ続いている。公園の入り口にスローカンの歴史を説明する標識が立っていて、鉱山の歴史とともに日系人キャンプの写真と説明が載っている。

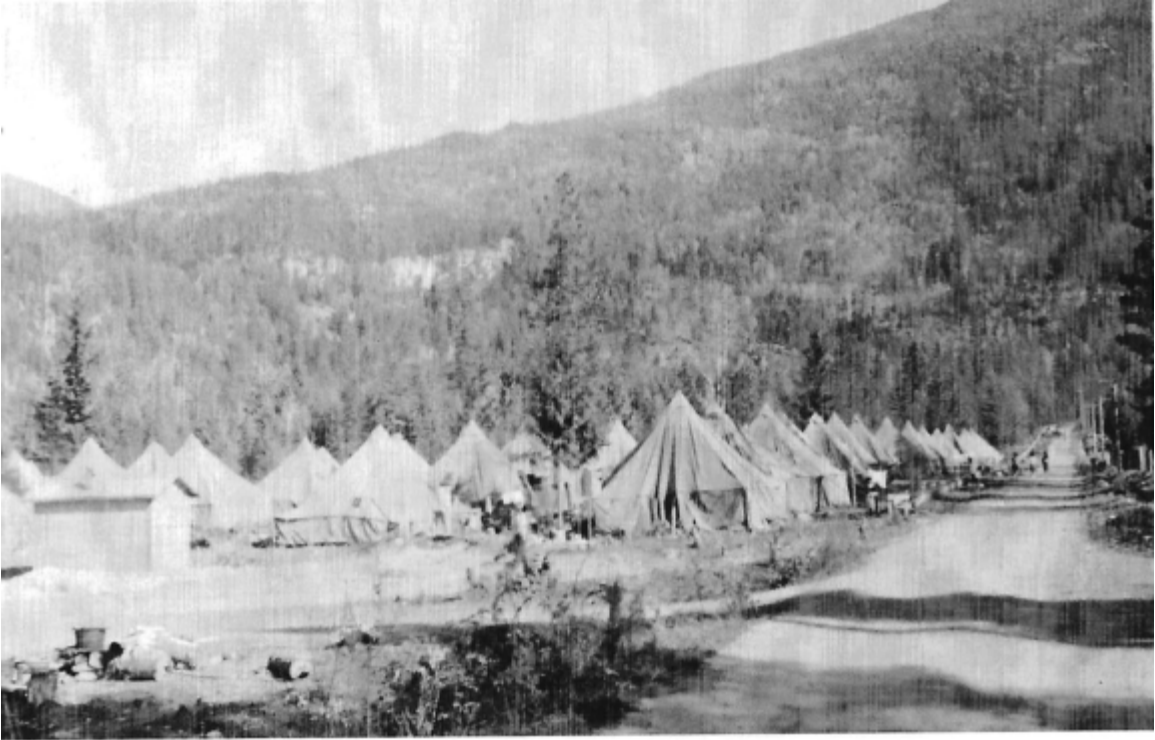


2016年の国勢調査によるとスローカンの人口は289人であるが、スローカン・バレーの行政機関がいくつか存在する。スローカン・コミュニティー図書館、郵便局、BC政府西クーテネイ事務所、カナダ退役軍人会第276号支部、スローカン・ビレッジ市場、公立学校、スローカン消防署などがある。

8月の平均温度が最低10.0度、最高18.5度、1月の平均温度は最低がマイナス7.1度、最高がマイナス0.2度。8月の最高温度記録は39.5度、1月の最低温度記録はマイナス31.7度。1月ひと月の平均降雪量は55.1センチ。

ベイ・ファーム・キャンプ (Bay Farm Camp)

ベイ・ファームはBCSCが農地を借り受けて簡易住宅を建設したキャンプでスローカンの南1.6キロにあり、スローカンとは砂利道で繋がっていた。1942年夏には軍隊テントの仮宿泊所に日系人が収容され、12月までに簡易住宅が完成した。1942年12月には1,376人の日系人が収容された。キャンプ内にアールブライト肉屋とハースト食料雑貨店が開店した。



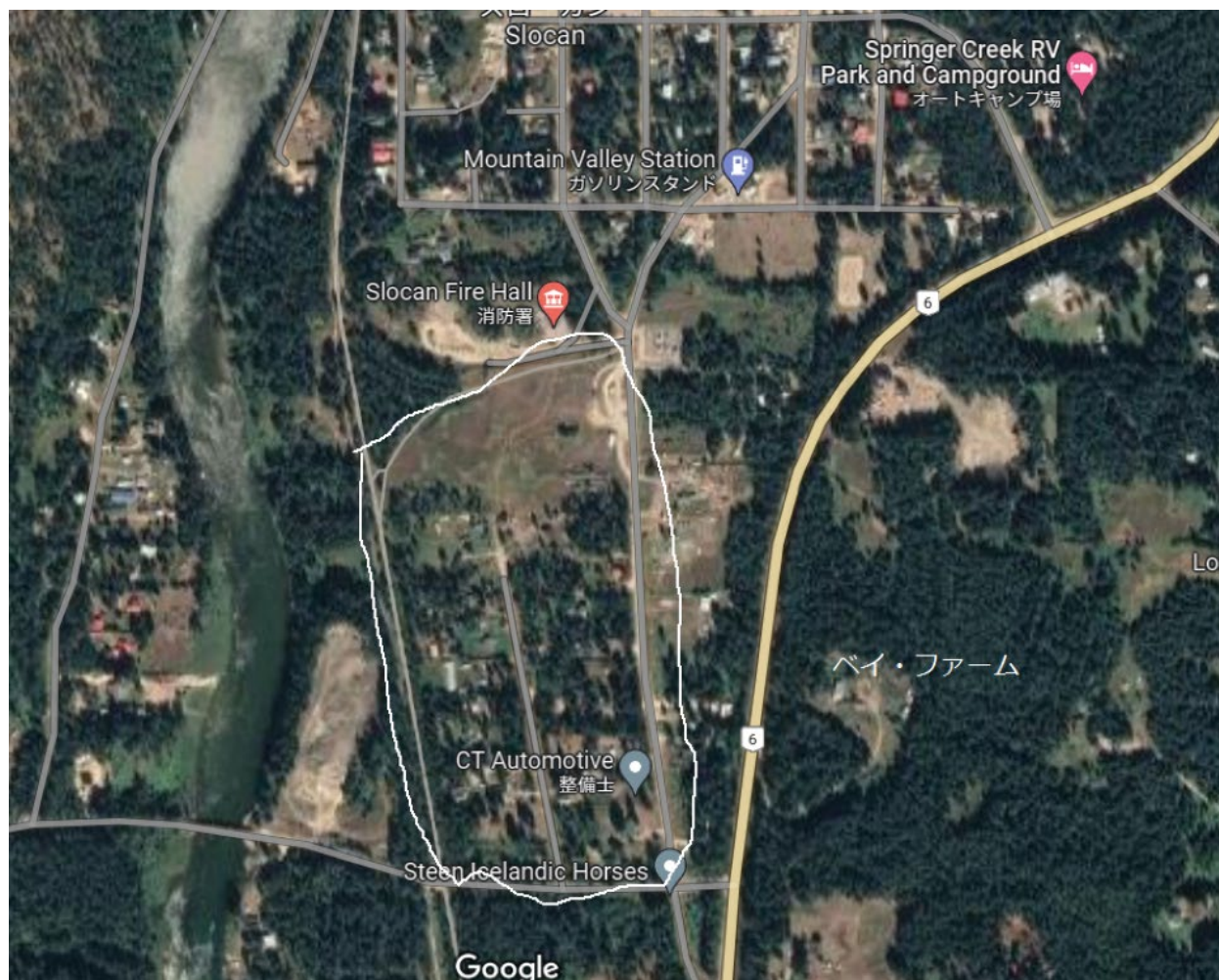
仮設テント ベイ・ファーム 1942年頃 NNM1996.178.1.15



The Town of Bay Farm; Bay Farm, BC c. 1944. NNM 2012.11.441

1944年のベイファーム

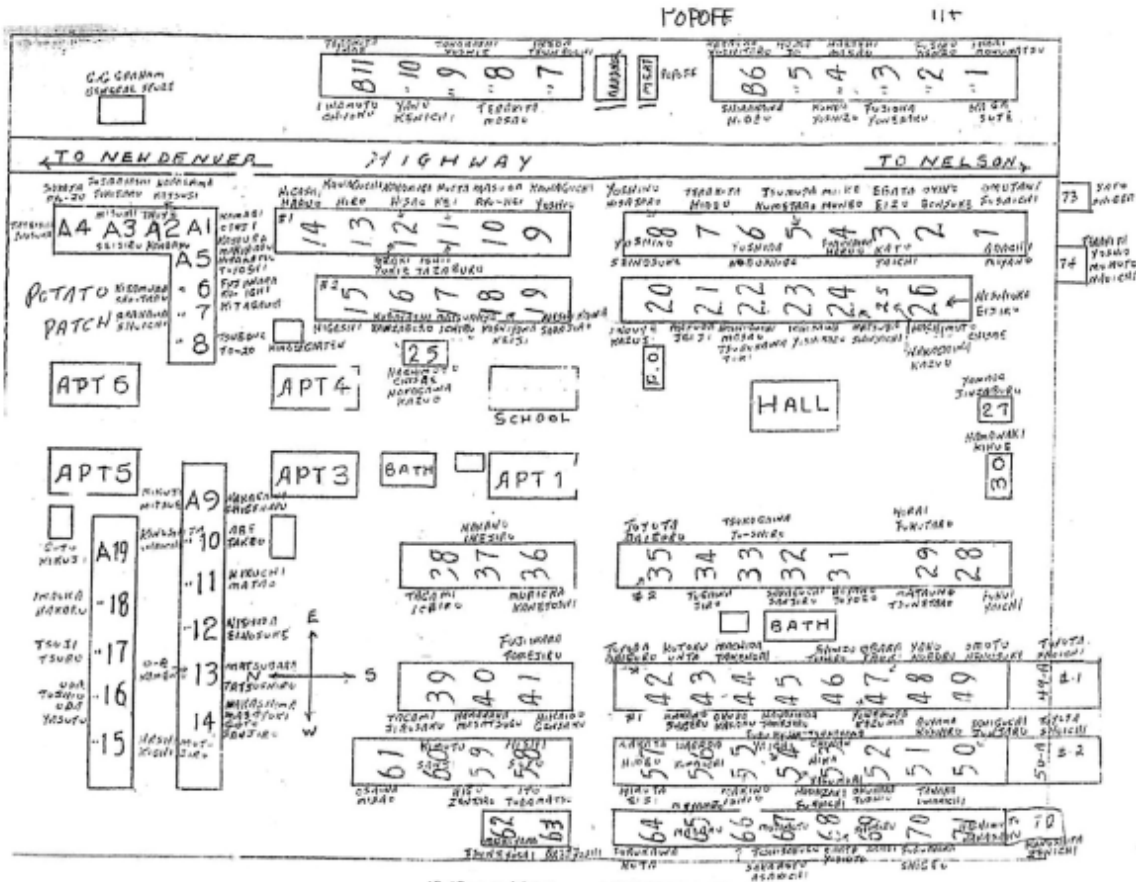
スローカンの町の南端から林の中の砂利道をドライブしてベイ・ファーム跡に行く。キャンプの北の端は草原が残っているが、その他は林の中に住宅が建っている。ここにベイ・ファームがあったという標識は無い。



白線に囲まれた部分がベイ・ファーム跡。

ポポフ・キャンプ (Popoff Camp)

ポポフはベイ・ファームの南 1.6 キロにあった農場を BCSC が借り受けてキャンプにしたもので、ベイ・ファームと同様に 1942 年夏には軍隊テントの仮宿舎であった。ポポフはバンクーバーからスローカン・バレーに送られてくる日系人の一時宿舎になった。BCSC はバンクーバーや道路建設キャンプから簡易宿舎建設のための日系人労働者をポポフに集めて、スローカン・バレーのキャンプの簡易宿舎の建設にあてた。これら労働者は先ず、ポポフに自分たちの宿舎用に木造 2 階建てのアパートの建設をした。その後、簡易住宅、学校を建てた。このアパートは後に高齢者と独身者の宿舎になった。1942 年 12 月までに 932 名の日系人がポポフに移動してきた。



ポポフに到着 NNM1994.69.4.19



1942年夏。
ポポフの住宅建設
労働者用のアパー
ト

ポポフの思い出（ジョージ・ドイ）

戦前、ジョージ・ドイはバンクーバー島のロイストン（Royston）で両親、2人の姉妹、3人の弟と暮らしていた。父親はカンバーランド（Cumberland）の炭鉱で働いたが、後に製材所に移った。第2次世界大戦の勃発とともに、一家はバンクーバーのヘイスティングス・パーク仮収容所に移動し、次に1942年夏、スローカン・バレーのポポフ・キャンプに移動した。この時ジョージはまだ11才であった。2020年12月にドイは“Discover Nikkei”に一家の戦時中と戦後の出来事を4回連載した。ポポフ・キャンプの様子を書いたものはごく少ないので、ここにドイの連載第三回の記事の抄訳を書いておく。

私達を乗せた列車はバンクーバーからホープ、フレイザー峡谷、リットン（Lytton）、オカナガン・バレーを通り、グリーンウッド（Greenwood）、グランド・フォークス（Grand Forks）、クリスティナ・レーク（Christina Lake）、ロウワー・アロウ・レーク（Lower Arrow Lake）、キャッスルガー（Castlegar）を通り、スローカン・シティー（Slocan City）に到着した。スローカン湖の南端のここが列車の終着駅であった。スローカン・シティーで列車から降りると連邦警察が名前を調べ、私達一家は手荷物と一緒にトラックに乗せられ、スローカン・シティーから南に4キロメートルのポポフ牧場に到着した。牧場には軍隊用のテントが林立していて、私達一家8人は一つのテントに押し込められた。私たちはスローカン・バレーの他の場所に簡易住宅が完成するまでテントで生活した。

BC州内陸部の冬は早い。私達がポポフに到着して数週間で雪が降り始めた。テントに中でもツララが出来た。服をたくさん着ても寒かった。毎朝早く起きて、戸外で焚き火をして体を温めた。食事はスローカン・シティーの戸外スケート場のテントで食べた。ポポフから食事のたびにスローカン・シティーまで3キロを歩いた。食事のデザートにチョコレート・パイ、カスタードクリーム・パイが出るときがあり、とても楽しみだった。ポポフとペリー・サイディング（Perry Siding）にはドカボー教徒のコミュニティーがあり、夏は馬車で、冬は馬車でキャベツ、人参、カブなどの野菜を売りに来た。新鮮な野菜は少なかったのもとても助かった。

スローカン・バレーに簡易住宅が建つに従って、ポポフでテント生活をしている人が移動していった。住宅が完成するたびにクジ引きでどの家族が移動するか決めた。私たちは運が良く、本格的な冬が始まる前にベイ・ファームの簡易住宅に移ることが出来た。私達の入った住宅は4.8メートル×7.2メートルで、中は3つに分かれていた。この冬は歴史的な寒さであった。生木で建てられ、タール紙が家の内側の壁に貼ってあった。外側に貼る家もあった。しかし、家の中はまるで冷蔵庫の中のように寒かった。生木の壁が乾燥するにつれて隙間が出来て寒気が容赦なく侵入した。私達の家では寝室にシングルベッドとダブルベッドを押し込んでいた。ベッドは2×4建材で枠を作り床板を貼っただけであった。マットは袋に藁をつめたものだった。

家の台所兼居間は2.4メートル×4.8メートルしかなく、ここにテーブル、木の棚、台所用品、炊事用薪ストーブがあり、家族と一緒に食事をする事は出来なかった。交代で食事をした。私は居間が混んでいるときは寝室で学校の宿題をして、食事の順番を待った。

冬は室内の結露が問題だった。窓枠が凍りつき、毎朝入口のドアの下の氷を割らなければ外に出られなかった。3軒か4軒に一つ、戸外に上水道の蛇口があったが凍りついて使えず、飲料水はトラックでスローカン・シティーからポポフに運ばれてきた。私達の家は小川に近かったので凍った小川の表面を割って水を汲み家の運んだ。しばらくしてから私たちは家の後ろに2.4メートル×

3.0メートルの物置を作り、家の一部の床を掘ってジャガイなどの地下貯蔵庫にした。家の暖房は最初は炊事用薪ストーブしかなかったが、あとで空き缶で薪ストーブを作った。

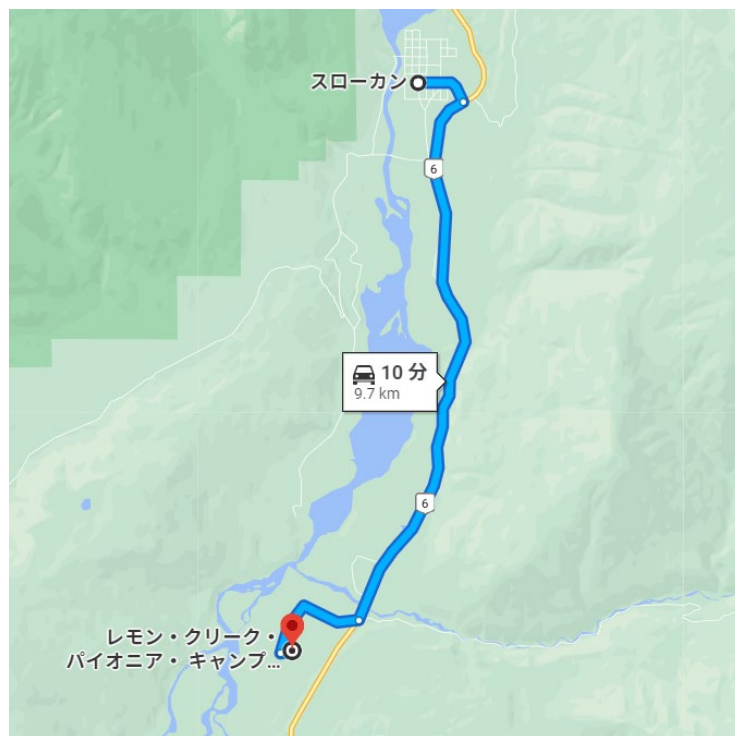
スローカン・バレーにはいくつかキャンプがあったが、キャンプ間の交流はほとんどなかった。それぞれのキャンプの人たちは、自分達の生活に忙しくして他のキャンプを訪問する時間がなかった。

ベイ・ファームには白人の八百屋が1軒と肉屋が1軒あった。しばらくしてからスローカン・シティーに日系人の大正堂ドラッグストアが出来た。ここで薬の他にお茶、コーヒー、砂糖、チョコレートなどを買うことができた。ポポプの簡易住宅から1.2キロの所にあり歩いて行くことが出来た。

ポポプの日系人は最初に学校を作り、子供の勉強が収容キャンプ生活で遅れないようにした。ベイ・ファームの学校はパイン・クレセント学校（Pine Crescent School）という名称だった。1945年か1946年に火災で消失したので、BC政府はスローカン・シティーの公立学校に通うことを許可した。既存の公立学校校舎だけでは日系人生徒を収容出来ず、町の教会や退役軍人クラブを高学年の教室に使用した。

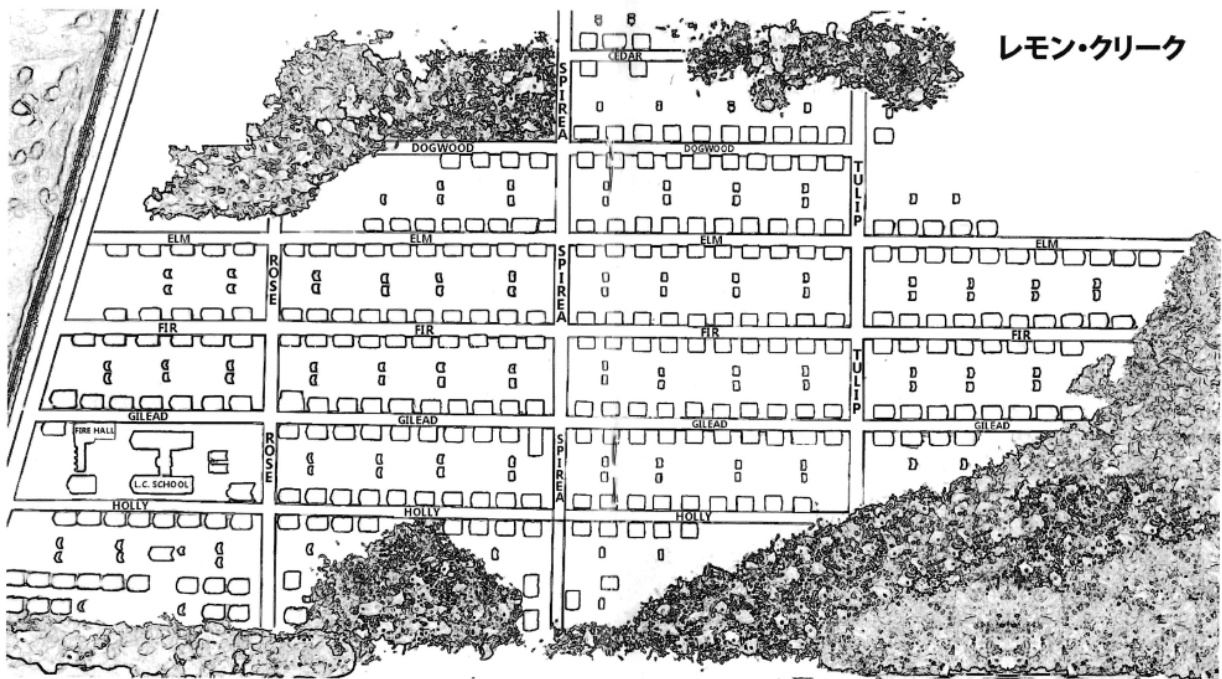
9月8日（木曜）レモン・クリーク（Lemon Creek Camp）

BCSCがスローカンから南に9キロ行った所の牧草地を借りてキャンプを設立した。1942年12月までに1,860名の日系人が移動してきた。キャンプにはカナダ合同教会、仏教会、3つの店舗があり大勢の日系人がコミュニティーを作って生活していた。スローカン・バレーのキャンプでニュー・デンバーに次いで2番目に大きなキャンプだった。キャンプは1946年に取り壊され全てがなくなった。





白線に囲まれた所がレモン・クリーク・キャンプ跡



1942年のレモン・クリーク・キャンプ見取り図



Townsite of Lemon Creek Shacks with mountains in background 1943. NNM1994.62.2

1943年のレモン・クリーク・キャンプ

スローカンからレモン・クリークまでは9.7キロ。レモン・クリークの橋を渡ってすぐ右にレモン・クリーク・キャンプ場という看板がある。600メートルほど進むと南北に走る砂利道に出る。この砂利道の南50メートルの所にまたキャンプ場の看板があるので、まずはキャンプ場に行くことにする。



レモンク・リーク・キャンプ跡

キャンプ場には人影がなく、キャンプ場の管理人の家らしきところにも人がいない。すると中年の女性が何処からともなく現れた。私たちがレモン・クリーク・キャンプの跡を探していると告げると、私たちの目の前の草原がそうだという。話を聞くと数年前に友人数人とキャンプ場にある大きな家を買って夏をここで過ごすと言う。ここが日系人のキャンプがあったところだと聞いて、日系人の強制収容についていろいろ調べたそうだ。私たちがキャンプ跡に案内をしてくれた。キャンプ場の西にスローカンから続いているスローカン鉄道トレイルが通っている。このトレイルからレモン・クリーク・キャンプ跡の草原の見えるところに、レモン・クリーク・キャンプの説明板が立っていた。



レモン・クリーク・キャンプ跡を眺める場所に建てられた説明板。

説明板には次のようなことが書かれている。

ここにレモン・クリーク・キャンプがあった？

「あなたの目の前の草原はかつて日系人クーテネイ収容キャンプがありました。そしてクーテネイ・バレーが銀鉱石採掘ブームで賑わって以来の最大の住居地になりました。しかし、ここで生活した1,800人あまりの日系人は自分の意思でここに移動してきたわけではありません。このキャンプは日系人の悲哀、喪失、服従、そして敗れた夢の上に建設されたのです。」

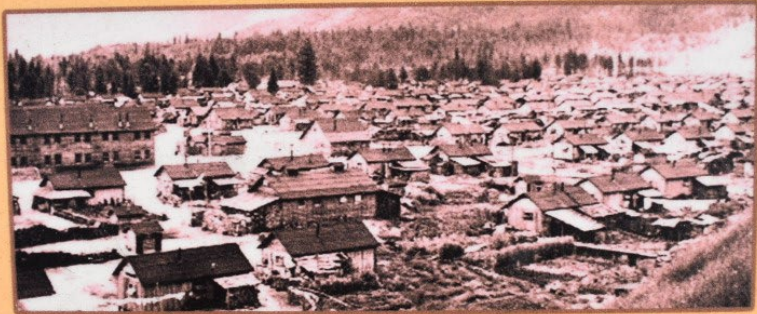
戦時の宣伝工作だけではない

「戦時の宣伝工作だけではなく、カナダ全体に広がっていた人種主義が日系カナダ人の生活の全てを変えてしまった。日系カナダ人の大部分はカナダ市民権を持っていて、そのうちの半数はカナダ

生まれであった。しかし、全ての日系人が自由、家、夢、市民としての権利、資産を戦時の国民ヒステリーのために失ってしまった。」

1946 - Lemon Creek Internment Camp is closed and quickly dismantled.
1949 - Four years after WWII ends, Japanese Canadians receive all rights of citizenship and are finally allowed to move back to the West Coast.

That Town In This Field?



The field in front of you was the site of the largest Kootenay Internment Camp, and the largest settlement in the Slocan Valley since silver rush days. None of the over 1800 Japanese Canadian residents were here by choice. This settlement was built on sorrow, loss, servitude and broken dreams.

注目をあびた旅客列車

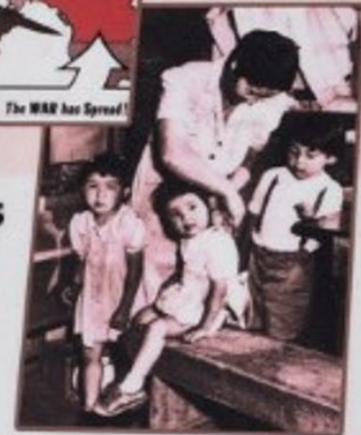
「1942年自分の家から追放された日系人が旅客列車で次から次へとスローカンにやってきた。クーテネイのゴーストタウンはすでに日系人で一杯であった。新しくやってきた日系人は次々と建てられてた収容キャンプに入った。白人農家から借り受けた農地、牧草地に、最初は軍隊テント、次に簡易住宅のキャンプが作られた。最終的にはレモンクリークに1,800人余り、ポポフに1,000人余り、ベイ・ファームに900人余りであった。」

Not Only Wartime Propaganda

.... but also an underlying climate of racism change everything for the Japanese Canadians. Most are Canadian citizens and over half are Canadian born. All lose their freedom, homes, dreams, rights of citizenship and possessions in the wartime hysteria.



from Maclean's Magazine, 1942



Closely Watched Trains



Trainloads of displaced people pour into Slocan City in the fall of 1942. The Kootenay ghost towns are already full of internees. The newcomers are housed in the mushrooming new camps, replacing tent cities in leased farmer's fields at Lemon Creek, (1800 persons), Popoff (1000 people) and Bay Farm (900 individuals).

At Lemon Creek, ...

... in leased farmer's field at Lemon Creek, (1800 persons), Popoff (1000 people) and Bay Farm (900 individual

At Lemon Creek, forced-work crews build 268 two-family cabins, most 28 by 14 feet. Two cubicle-sized sleeping rooms with a kitchen between them provide quick, but rudimentary housing for two families or ten persons. Outhouses, washing and bathing facilities are shared.



「レモン・クリークでは床面積 4.8 メートル x 7.2 メートルの 2 家族用の簡易住宅 268 軒が建てられた。家の両側に二つに区切った寝室があり、中央は台所であった。この原始的な住居が日系人 2 家族、または 1 家族 8 人の住居になった。トイレ、洗濯、入浴施設は簡易住宅の外にあり共同で使用した。」



ons.
old.
that
la.
en
es.
ntled.
rights
st.

secondary and 465 elementary students. Moritsugu and the Ghost Town Teachers Historical Society

Internees At Work And Play

Many Worked in the Bush
They wanted to shut down all our work, but the mill owners wouldn't have that. Tom Tagami Sr.

Lemon Creek Scrub
"We thought we could play baseball but these guys just ran circles around us."
 Jim Tinkens from the Langham Tapes

"There are many to whom the eastward trek is a fearsome journey. Burdened with young children or aging parents it is not easy to leave the camps for a place of doubtful welcome and dubious future."
 Tommy Shoyama in The New Canadian Newspaper

photo and citation from Asahi A Legend in Baseball by Pat Adachi

"Baseball made it possible for the rest of us Nisei to hold our heads higher when BC society kept telling us we were second-rate and not Canadian enough."

収容者の仕事とレクリエーション

「多くの日系人が森林伐採と製材所で働いた。白人労働者は日系人の仕事を廃止しようとした。しかし、製材所経営者は日系人労働者を必要としていたので、日系人の雇用を続けた。東部カナダに移動するのを恐れた人たちがいた。幼い子供や高齢の両親をもつ日系人がキャンプを出て、日系人を歓迎しない、不確かな将来が待っている所に行くのは簡単ではなかった。」

レモン・クリークの思い出

「私は母と一緒にレモン・クリーク・キャンプ跡を訪ねた。しかし、何も残っていなかった。何千人という日系人が4年を過ごした場所にそのことを記すものはなにもなかった。」

1946年の後半にレモンクリーク・キャンプは閉鎖され、日系人は他のキャンプ、ロッキー山脈の東での仕事、または日本に移動させられた。

「BCSCはレモン・クリーク、ポポフ、ベイ・ファームの簡易住宅を一戸50ドルから70ドルの破格の値段で地元の白人に売却した。」

...camps for a place
welcome and dubious future.”
Tommy Shoyama in *The New Canadian Newspaper*

...telling us we were second-rate
and not Canadian enough.”

Moving



Memories

“I went up to Lemon Creek with my mom and visited that field. There really is nothing much there, nothing to mark four years of thousands of peoples’ lives”

Leslie Komori

By late 1946 Lemon Creek was closed. Internees were shipped to other camps, to jobs East of the Rockies or to Japan.

“They started selling internment shacks for \$50 to \$75 each, a bargain price for all the locals. The unsold shacks in Lemon Creek, Popoff and Bayfarm were cut into sections, loaded onto flatcars and shipped to the prairies. They would pay you \$10 to cut a house up into sections”

Tom Tagami Sr. as cited in Nikkei Images

Education: Always A Priority



26 Lemon Creek teachers taught 117 secondary and 465 elementary students.

First Lemon Creek Principal Irene Uchida Remembers

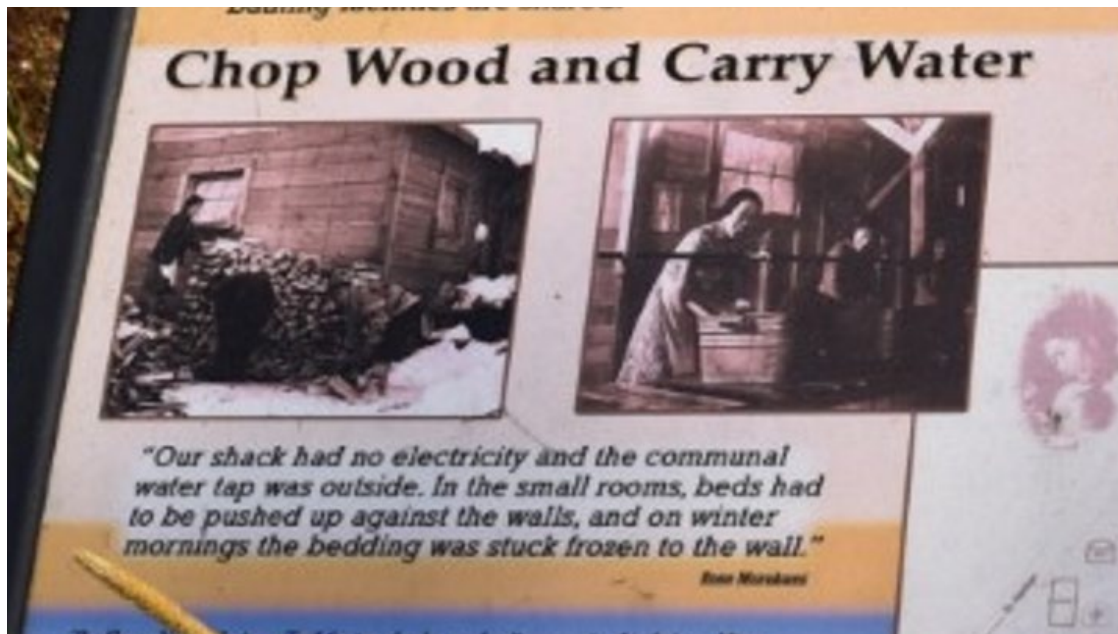
“After constructing housing, the Security Commission work crews spent the rest of that winter (1943) completing our school-to-be. The two large wooden buildings were joined by a roofed corridor. Lemon Creek was the largest camp, but had no electricity. Everything was powered by a diesel generator.”

photo and citation from Teaching in Canadian Exile by Frank Moritsugu and the Ghost Town Teachers Historical Society

教育がいつでも最重要事項

レモン・クリークの学校の最初の校長だったアイリーン・ウチダは次のように話している。

「簡易住宅が完成すると BCSC の建設労働者は 1943 年初めの冬を学校の校舎の建設に費やした。二つの大きな木造の建物を屋根のついた廊下で結んだ。レモン・クリークはスローカン・バレーの一番大きなキャンプだったが電気は届いておらずディーゼル発電機で発電していた。」



薪を切り水を汲んで運ぶ

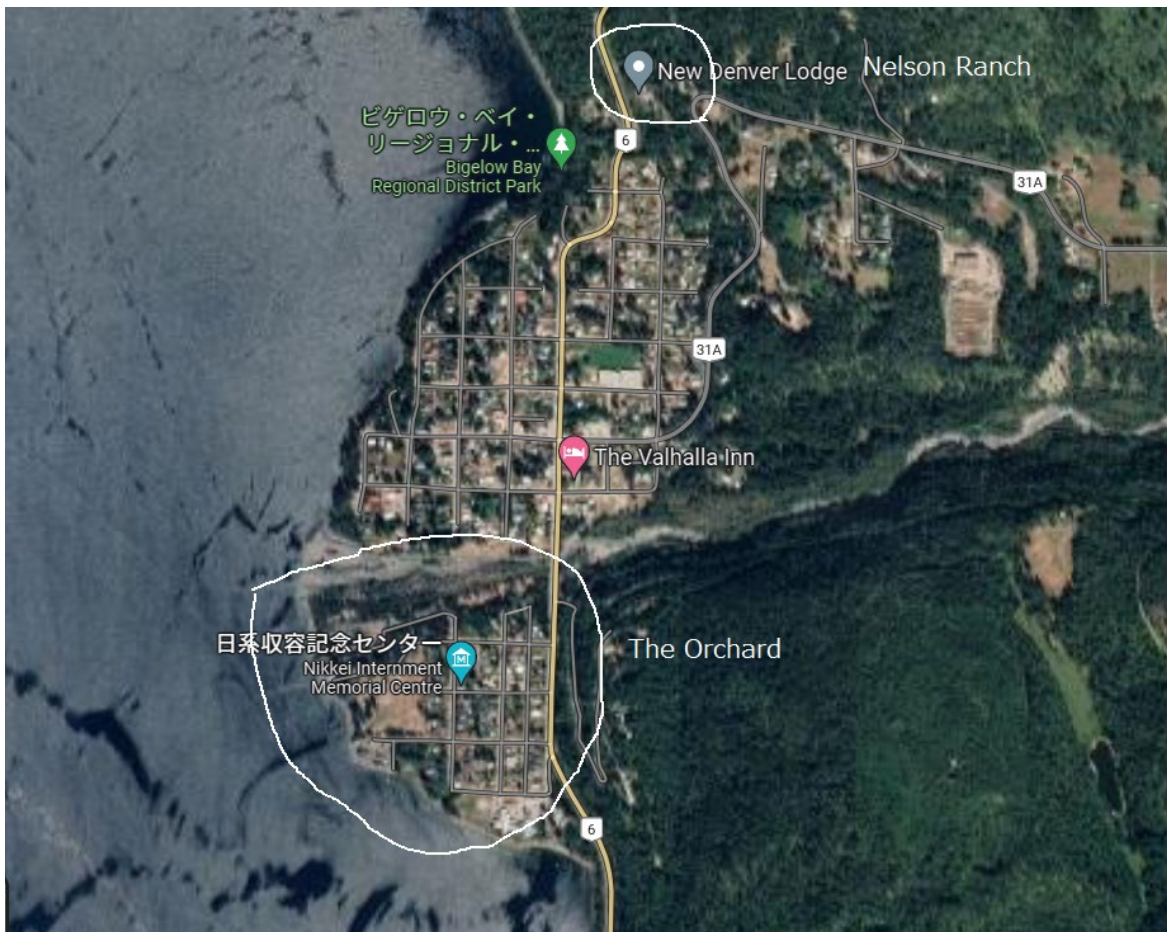
「簡易住宅には電気がなかった。日常、水は戸外にある共同の水道の蛇口で汲んで家の中に運んできた。日中はベッドを壁に立てかけて空間を作った。冬の朝はベッドの敷布に部屋の中の湿気が氷結して、敷布が壁に張り付いていた。」

説明板の近くのキャンプが眺められる所にベンチが置いてあり、ベンチには金属製の飾り板が付けてある。飾り板には英語の献辞が書かれていて、日本語では「ケン・アベ（レモン・クリーク）とルス・アベ（旧姓トヨタ、ニュー・デンバー）に捧げる。日系一世の不屈なパイオニア精神を懐かしく思い出しながら。」という内容である。



9月8日（木曜）ニュー・デンバー キャンプ（New Denver Camp）

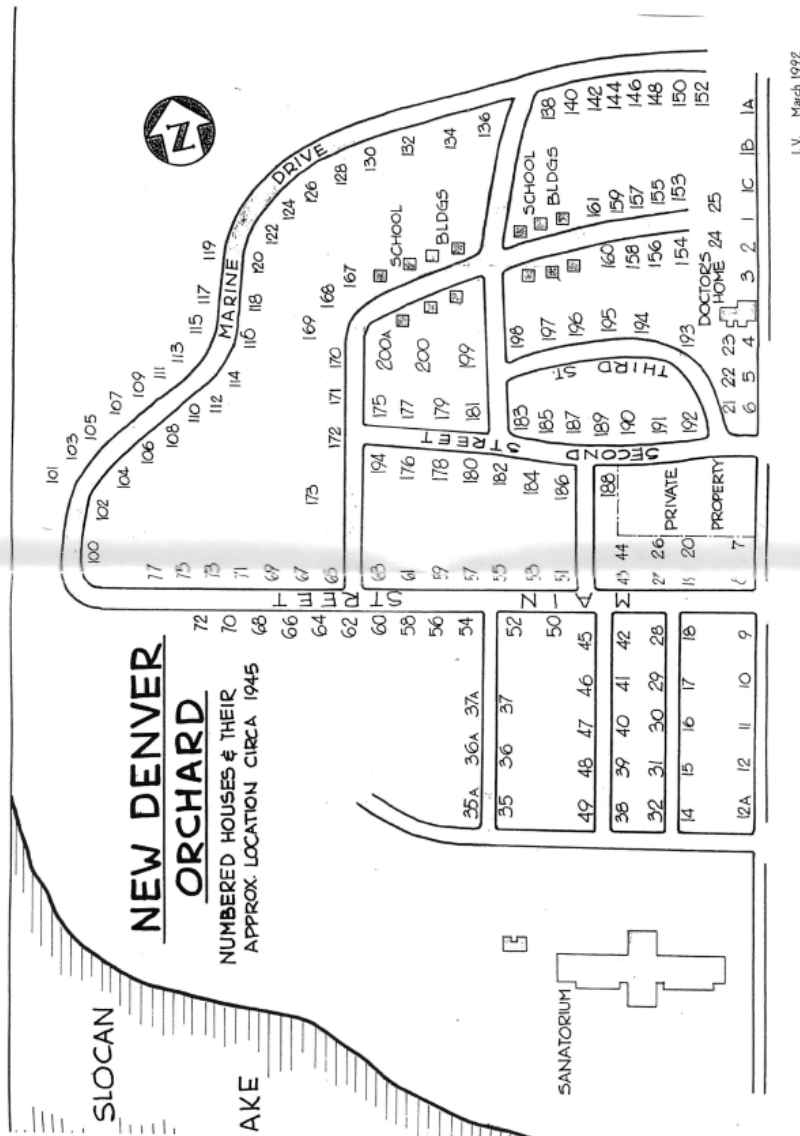
ニュー・デンバーは1890年代に周辺の鉱山で働く人々を相手にした商業の町として栄えた。湖畔に蒸気船の発着所があり、2日に一度馬車便がナカस्पと、4日に一度ネルソンと往復した。1895年にはナカस्पとサンドンを結ぶ鉄道の停車駅になった。しかし、周辺の鉱山が閉鎖するに当たってニュー・デンバーの人口も減少した。1942年、BCSCが町を二つに分ける小川の南側の果樹園、町から南に2キロの所にある60エーカーのハリス牧場、町の北東に隣接した2エーカーのネルソン牧場の3つを借りて、日系人の収容キャンプを造営した。この時にはニュー・デンバーの人口は350人であった。



現在のニュー・デンバーの航空写真とネルソン・ランチとオーチャード・キャンプの位置。現在の町の中心は中央の小川の北側である。



1942年のオーチャード・キャンプの跡は現在は住宅地である。そこに日系収容記念センター、湖畔リフレクション庭園、スローカン地区病院（1942年当時の結核療養施設のあった場所）がある。



1942年当時のオーチャードの見取り図

前ページの現在の航空写真と比べるとオーチャード・キャンプの現在の様子がよく分かる。

キャンプの一番北側の Marine Drive の中央から少し東によったあたりに現在の日系収容記念センターがあり、結核療養所のあった場所にスローカン地域病院が建っている。

I.V. March 1992
ニュー・デンバーの東側に番号がふられた住宅の配置、1945年頃、1992年3月制作、NNM所蔵

1942年夏に BCSC が日系人労働者を使って、オーチャード・キャンプ、ハリス牧場、ネルソン牧場に簡易住宅を建設した。これらのキャンプに日系人の第1陣が到着したのは1942年5月21日であった。簡易住宅がまだ完成していなかったため、町の空き家になっている建物や個人住宅を修繕して住んだ。また、オーチャード・キャンプに結核療養所を建設し、1943年にバンクーバーのヘイスティングス・パークの病院にいた患者と他からの患者合わせて110名がここに移動してきた。マツブロウ・ウチダ医師が結核患者の世話をした。ウチダ医師はニュー・デンバーとローズベリーの日系人の世話をし、スローカン地域病院の患者も診査した。ニュー・デンバーの町に外来診療所を開いて日系人と白人の診察もした。ニュー・デンバーには日系人のクマガイ歯医者やヘンリー・ナルセ検眼士もいた。

ニュー・デンバー・キャンプに移動してきた日系人は、主に子供を持った寡婦、高齢者、自活できない障害者や病人、結核患者とその家族であった。カナダ合同教会の信者が多かった。ここでも日系人は子弟の教育を大切にして「果樹園小学校」、「レークビュー中高等学校」を設立した。運営

はカナダ合同教会が担当した。また、ケベックのカソリック教会が運営する中高等学校があり、カソリックでない日系人子弟も受け入れていた。

果樹園と療養所 ニュー・デンバー、BC州 1943年頃 NNM 1992.32.19



1943年頃のオーチャード・キャンプを南から見た写真。結核療養所が湖岸にある。



現在のスローカン地域病院

1942年当時の建物の一部が修繕されて地域病院に一部になっているのがわかる。



スローカン地域病院前の湖岸



日系収容記念センターの入り口

1946年連邦政府は日系人にロッキー山脈の東か日本に移動することを強制し、キャンプの閉鎖を始めた。ニュー・デンバーは他の閉鎖されたキャンプの日系人を一時的に收容するキャンプになった。ニュー・デンバーには結核療養所の患者とその家族がいたので、簡単には他に移動できなかった。ニュー・デンバー・キャンプはキャンプの中で一番遅い1957年に閉鎖された。閉鎖後、キャンプは通常の町のように区画整理された。1960年、BC政府は簡易住宅と土地を、まだキャンプに残っていた日系人に譲渡した。

日系人收容所記念センター（Nikkei Internment Memorial Centre）

ニュー・デンバーに残った日系人は「ニュー・デンバー協和会（New Denver Kyowakai Society）」を組織して1994年に「日系人收容所記念センター」を開館した。現在は協和会の会員が高齢化したので、ニュー・デンバー村（Village of New Denver）が運営を引き継ぎ、募金、全カナダ日系人協会と村のボランティアの支援で維持している。センターは様々な活動をしていて2021年にはニュー・デンバーの住民アン・シャンペイン（Anne Champagne）によるニュー・デンバー・キャンプと、協和会による日系人收容所記念センターの設立の話を書いた76ページの小冊子「協和会、ニュー・デンバーの思い出と癒やし（Kyowakai: Memory and Healing in New Denver）」を発行した。この本はBC州バーナビーの日系文化会館・博物館で購入可能である。（日系人收容所記念センター <https://newdenver.ca/nikkei/>）。

センターには6つのニュー・デンバー・キャンプの建物が移築されている（4つの住居、戸外トイレ、集会所）。集会所はキャンプの写真と日常品の展示に使われている。



センターの日本庭園



BCSC の大きい簡易住宅



簡易住宅入り口横の暖房用薪ストーブ



台所と木製のシンク



寝室とベッド



元の集会所、現在は展示場



集会所の展示



集会所に展示してある軍隊用テント

日系人収容所センターの門を入ると右手に受付の建物があり、正面は日本庭園になっている。日本庭園の小川を模したところは白い砂利が敷き詰められていて、熊手で川の流れるような模様がついている。センター内はどこもきれいに掃除がしてあり手入れが良い。受付には中年の白人女性のボランティアがいて日系人の強制移動とニュー・デंबर・キャンプの話をも15分ほどしてくれる。私の理解している強制移動の話と同じで、日系人の歴史をよく勉強しているようだった。私が来てから5分ほどして、60代の日系人男性が受付に来た。私と一緒にボランティアの話も聞いていた。この人は現在BC州サモナム（Salmon Arm）に住む日系3世で、戦前、祖父がBC州ステーブストンに住んで、フレーザー河、スキーナ河、プリンス・ルパートで漁をしていた。しかし太平洋戦争勃発と同時に漁船を押収されて、一家でヘイスティングス・パークに収容され、その後サンドンに移動したという。サンドンへの移動中に祖母は死亡し、戦後いろいろな所に移動し、最終的にサモナムに落ち着いたという。この三世は両親から強制移動の話も聞いて興味を持ち、自分たち一家の歴史を調べているという。このセンターもサモナムから近い(250キロ)ので夏にはよく訪れるという。子供たちと一緒に来たこともあるという。この受付ではここを訪れる日系人のために、スローカン・バレーのキャンプの資料も揃えていて、この三世もサンドンの日系人名簿に両親の名前を見つけた。

センターに移築した二家族用の簡易住宅の中に入る。日系人の思い出に、簡易住宅の狭いこと、寒かったことがよく出てくるが、実際に中に入るとその狭さに驚く。ここで二家族8人が4年余りも生活したと想像するのが難しい。以前から簡易住宅で気になっていたことがある。簡易住宅は2×4建材で枠組みを作り、横板を枠組みに打ち付け、断熱材は仕様せず、横板をタール紙で覆い、それをまた数か所横板で固定したと書いた記録が多い。このタール紙を家の外側、内側、それとも両方に貼ったかどうかははっきりしない。このセンターに残る簡易住宅ではっきりするかとおもったが、タール紙は既になくなっていて、簡易住宅自体80年余りの年月を経ており、保全のための修

復が加えられている。簡易住宅の入口に、建材が脆くなっているのでは触らないようにという注意書があった。

キャンプ当時のお寺兼集会所が展示館になっていて、スローカン・バレーのキャンプの写真と説明が壁にはってある。また、日系人の日常用いた品物が展示してある。簡易住宅が完成するまで日系人が入っていたと同じ陸軍テントが一つ張ってある。この中で2家族が暮らしたという記録があるが信じがたい。

オーチャード・キャンプは戦後区画整理されて、東半分は林の中に住居の点在する住宅地になっている。西半分は大きな広場になっている。車をセンターの前に駐車したまま住宅地と公園を歩いて見ようとおもった。歩き始めると犬を散歩させていた女性が話しかけてきた。「どこに行くの?」「この辺を歩いてみようと思っています。」「じゃあ、熊に気をつけてね。今は木の実の季節だから、熊が冬に備えて木の実を食べようと、この辺を歩きまわっているの。そら、道の向こうの家の庭に、黄色の紙に黒い熊の絵が書いてある小さな立て札が立っているでしょう。あれは現在このあたりに熊がいるから注意ということ。それにほら、センターの前の道に黒い塊が落ちているでしょう。あれがまだ新しい熊の糞。」熊が嫌いな私たちは散歩を諦めて車で住宅地をまわることにした。



センター周辺の住宅地、左のカナダ国旗のあるところがセンターの入り口。

広場の南に「湖畔庭園（The Kohan Reflection Garden）」がある。



湖畔公園の入り口



「湖畔庭園」

湖畔リフレクション庭園は第二次世界大戦中にここに収容された日系人を記念するために設立された。協和会婦人会が植えた桜の木に囲まれて茶室がある。この庭園は現在もスローカン・バレー庭園協会とニュー・デンバー村のボランティアによって手入れされ、造園が続いている。また庭園の維持には市町村、州政府、連邦政府、コロンビア河流域基金の支援を受けている。



湖畔公園からスローカン湖を望む。

BCSCはニュー・デンバーから南に2キロのスローカン湖の湖畔にあった60エーカーのハリス牧場（Harris Ranch）を借りて23戸の簡易住宅を建てた。また牧場近くの大きな住宅を借りて高齢の独身者の住居にした。



Photo of Harris Ranch NNM 1992-32-20

1942年のハリス・キャンプ



Harris Ranch Old Man Camp NNM 2012-29-2-2-33

ハリス・キャンプの高齢独身者住居

BCSC はニュー・デンバーの北東に隣接した 2 エーカーのネルソン牧場 (Nelson Ranch) を借りて、牧舎を改造してアパートにした。牧場には果樹園と菜園があり日系人が利用した。

ハリス・キャンプとネルソン・キャンプの跡は特定できなかった。

2016 年の国勢調査によれば、ニュー・デンバーの人口は 473 人で、村は周辺の住民の生活を支えている。町には幾つかの宿泊施設、連邦警察事務所、日常雑貨店がある。ナカस्पからキャッスルガーに通じる主要道路の上であり、ここから東に山を超えてクーテネイ・バレーのカスローに行く道路の分岐点になっていて、夏の観光シーズンには村を通過、滞在する人が多い。

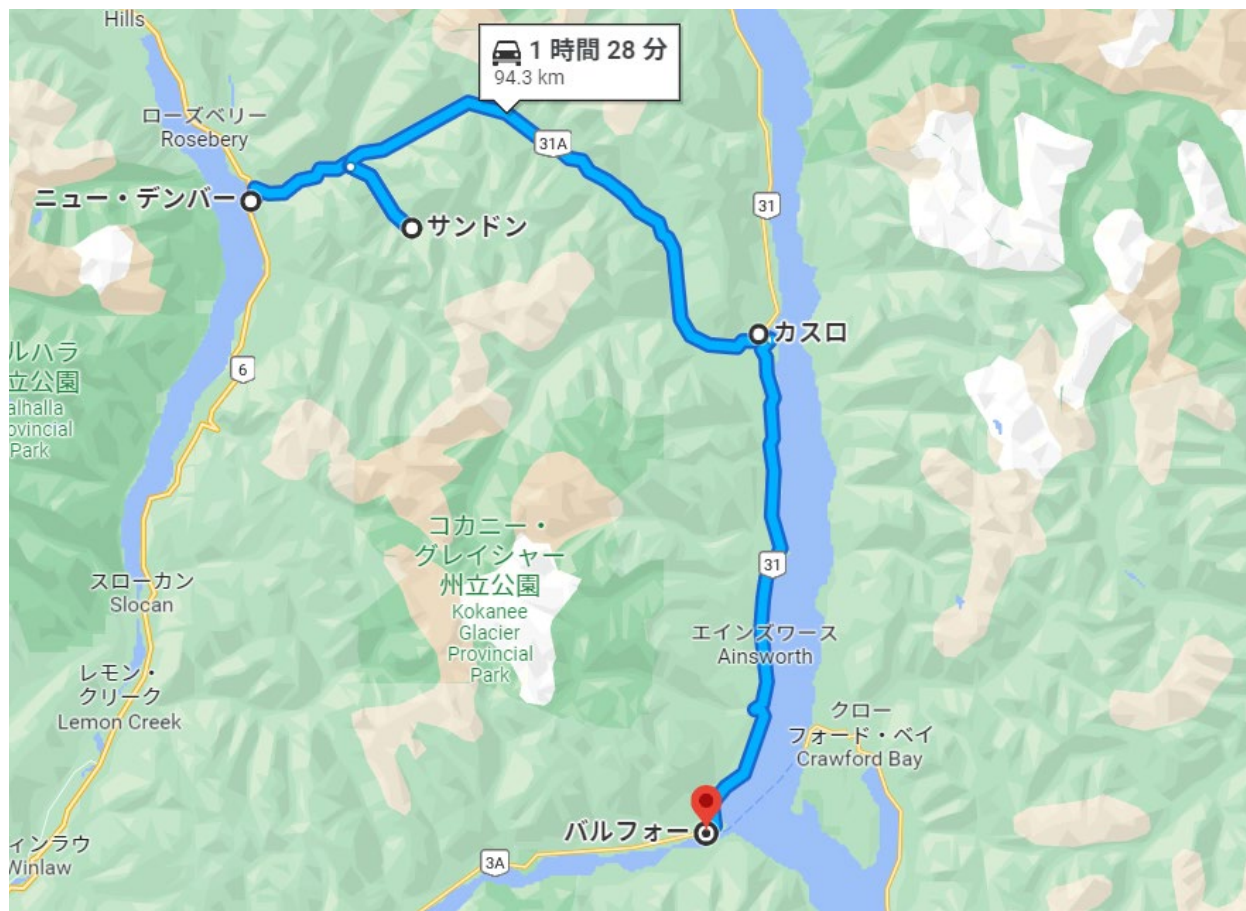
[\(目次に戻る\)](#)

9月9日(金曜) サンドン、カスロー キャンプ (Sandon, Kaslo Camp)

快晴、朝摂氏 10 度、午後摂氏 25 度

サンドン・キャンプ

今日はニュー・デンバーから東にカスローに行く山間の道路を走り、途中、サンドン・キャンプ跡を訪ねる。サンドンはカスローに行く道路から南に谷川に沿った砂利道を走って深い谷間の中にある。

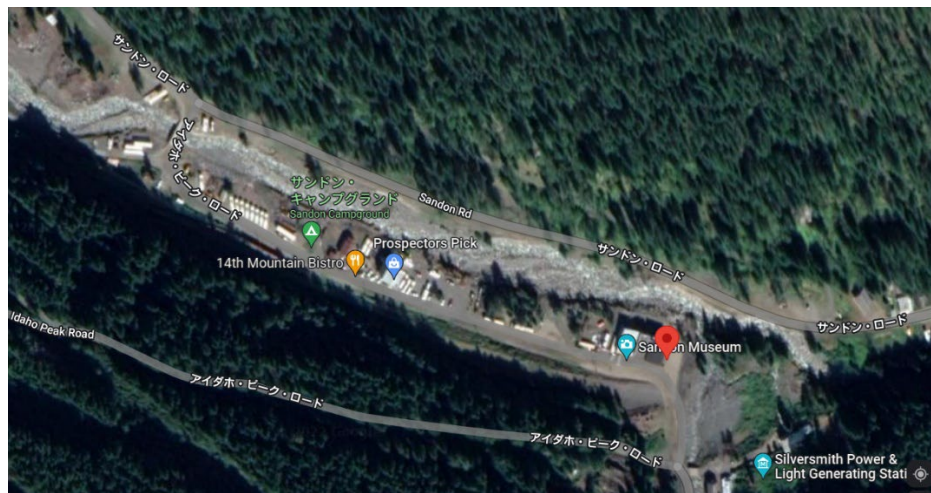


1891年にサンドンで鉛・銀が発見されて以来、この周辺に探鉱者が殺到し、鉛・銀が次々と発見された。1895年までに鉱石を運び出す鉄道二本がサンドンまで敷設された。1898年までの町の人口は5,000人余りになった。サンドンには周辺の鉱山で働く労働者の生活を支える町としていろいろな施設が建設された。ボーリング場、玉突き場、アイスホッケー場、スキー場、水力発電所、29のホテル、28の酒場などである。1890年代の土曜日の夜には、周辺の鉱山の労働者も含めて1万人余りの労働者が町に溢れたという。しかし、1920年までに鉱石が採掘しつくされるとサンドンは急速に寂れた。

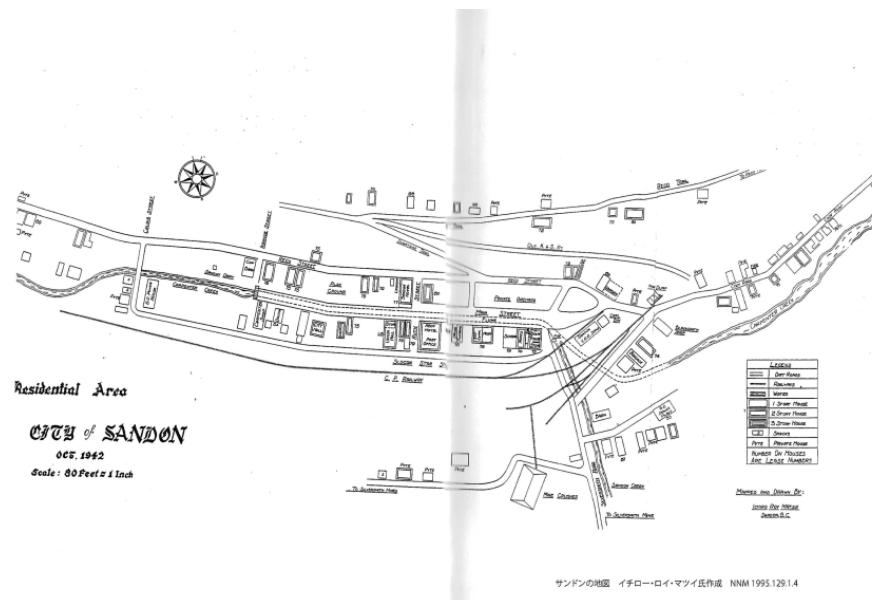
1942年11月に日系人933人が到着した時、サンドンにはわずか20人ほどの住人しか残っていなかった。BCSCが町に残っていた建物を借受け、日系人が修繕して住んだ。当時、ここはまさしくゴーストタウンでどの建物も中はホコリにまみれていたが、鉱山ブーム当時のままだったという。ここに来た日系人はポート・エシントン、ビクトリア、スキナ、ステーブストン、フェアビュー、そしてバンクーバーのパウエル街の人が多かった。BCSCは55の建物を修繕または建てて日系人のキャンプとした。日本式風呂場も作り、13エーカーの土地を借りて野菜畑にした。仕事の機会はすくなかったが、ここに移動して来た人には高齢者が多かった。1942年12月にはサンドン学校が開校した。

谷間の奥の外界から孤立した生活環境の厳しいところだったので、1944年日系人の再移動が始まると最初に閉鎖され、サンドンはまたゴーストタウンに戻った。1955年に町の中心を流れる川が氾濫して多くの建物が流された。現在残っている1942年当時の建物は、1900年に建てられた町役場（City Hall）と水力発電所だけである。2本の鉄道は撤去されていもうないが、機関車一台が置いてある。

サンドンは谷の片側に鉄道線路があり、中央に川があるので平地が少なく、川を木材で覆って道路（ボードウオーク）にして町の大通りにした。建物はみな、このボードウオークの両側に建てられた。ボードウオークは1955年の洪水で流されてしまっていて残っていない。現在は線路横の道が大通りになっている。



現在のサンドンの航空写真



1942年当時のサンドンの地図



1890年代のサンドンのボードウオーク。両側の建物がボードウオークに向いて建てられているのがわかる。このボードウオークの下を川が流れていた。



1942年のサンドン。中央ボードウオーク。川の上流を望む。



現在のサンドンの大通り。谷の下流を望む。中央よりすこし左の小さな黄色の壁の建物がスナック。右の大きな木造の建物が 1900 年建設の町役場。日系人がアパートとして使っていた。



谷の上流を望む。右が水力発電所。中央の草原は日系人が野菜の栽培に使っていた菜園。



サンドン博物館



博物館から下流をみる。サンドンが採鉱ブームの時はこの川の上がボードウオークになっていた。
前日の9月8日にエリザベス女王が崩御され、博物館のカナダ国旗が半旗で掲げられている。

博物館は 10 時開館なのでそれに合わせてサンドンに到着するようにした。大通りの駐車場横に小さなスナックがある。ここで昼食を予定していたので、まずは車を止めて外にでる。すると白人の中年女性が話しかけてきた。「日系人キャンプの跡を見にきたのか？それなら色々教えてあげられることがある。」と言って、サンドンの歴史とここの日系人キャンプについて 10 分ほど話してくれた。ニュー・デンバーの日系人収容所記念センターのボランティアかと聞くと、後ろのスナックの経営者だという。サンドンは鉱山のゴーストタウンとして有名で、ゴーストタウン巡りの観光客が夏は多く、その人達に鉱山の話と日系人キャンプの話をするのだという。そして、川の上流の発電所と博物館を見るように、また発電の前の草原は、かつて日系人の野菜畑だったと教えてくれた。現在、サンドンの住人は 5 人で、スナックに 2 人、発電所に 2 人、博物館に 1 人働いているそうだ。

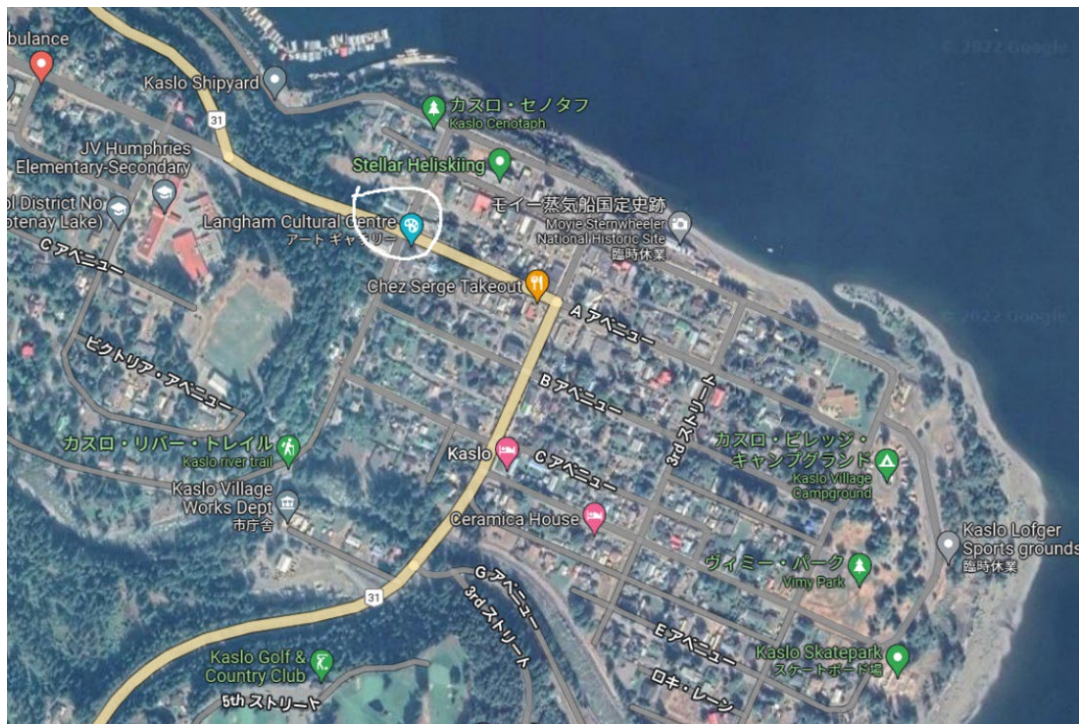
早速、川の上流にある発電所に行く。発電所のガイドが丁寧に発電所の歴史を説明してくれた。日系人キャンプがあった時、日系人は周囲の鉱山、製材所で働いたが、この発電所で働いた人もいたという。発電所の次に博物館に向かう。サンドンの歴史と日系人キャンプの歴史が写真で説明してある。博物館の次にスナックで昼食をとる。外のテーブルに席を取って辺りを眺めていると、観光客が数組やってきた。この山奥のゴーストタウンは実は有名観光地なのかもしれない。

9月9日（金曜）カスロー・キャンプ（Kaslo Camp）

サンドンから山道を東に 44 キロ走りカスローの町に到着した。

カスローはクーテネイ湖の西岸の町で、1890 年代に周辺の銀山からの銀鉱石を蒸気船でネルソンに運び出す物流拠点であった。ネルソンから列車でカナダ、米国に運送することが出来た。またサンドンから列車がカスローに到着した。しかし、銀鉱石開発ブームは終焉した。特に第 1 次大戦後にはそれまで存続していた鉱山も次々に閉山になった。

1942 年にカスローの人口は 500 人余りであった。BCSC は 52 軒の空き家と野菜栽培用の 20 エーカーの農地を借りて日系人のキャンプにした。バンクーバーからの日系人第 1 陣は 1942 年 5 月に列車でネルソン（Nelson）に到着し、外輪船ナスーキン号（Nassokin）に乗り換えてでカスローに着いた。1942 年 10 月末までにカスローの日系人は 964 人になった。ランガム・ホテル（Langham Hotel）に 78 名が住んだ。現在、ランガム・ホテルは修復されてランガム博物館・劇場・美術展示場になっている。1 階に劇場と美術展示場があり、2 階と 3 階は日系人の博物館になっていて、幾つか部屋が当時の様子に再現されている。この施設はランガム文化協会が所有して運営している。



現在のカスローの航空写真



SSナスーキン号からカスロで下船する移送者 1942年5月13日 NNM2011.19.15

1942年5月13日、外輪船でカスローに到着した日系人



Overview of Kaslo 1940s - the back of The Langham in right foreground. Kootenay Lake Archives 995.002.0082

1940年代のカスロー



Husso Hasebe playing near the rear of the Langham Hotel.
Kootenay Lake Archives 995.002.0150

1942年、ランガム・ホテルの裏で遊ぶ子供



1970年代の修復前のランガム・ホテル



現在のランガム劇場、博物館、美術展示場

2016年の国勢調査によるとカスローの人口は968人でこの周辺の観光の中心地になっている。BC州、アルバータ州から引退後に移り住む人も多い。8月の平均最高温度が25度、2月の平均最低温度がマイナス4度と過ごしやすく、クーテネイ湖に面して山に囲まれ風光明媚な地である。町の中心には9ホールのゴルフ場もある。

ランガム博物館の案内係は70代の白人女性で、10年前にエドモントンから夫婦でカスローに引っ越してきて以来、すっかりここが気に入っているという。来週はエドモントンから息子家族が訪ねてくるのが楽しみだそう。早速、案内してもらおう。1階の美術展示場ではニュー・デンバー近くに住む日系人画家ツネコ・コクボの絵画展が開かれていた。2階に上がる階段の両脇の壁に日系人キャンプの写真と説明が展示してある。2階、3階の壁も同様である。私たちの他にも訪問者が数組訪れて日系人キャンプの説明を読んでいた。



ツネコ・コクボの絵画展



2階に行く階段

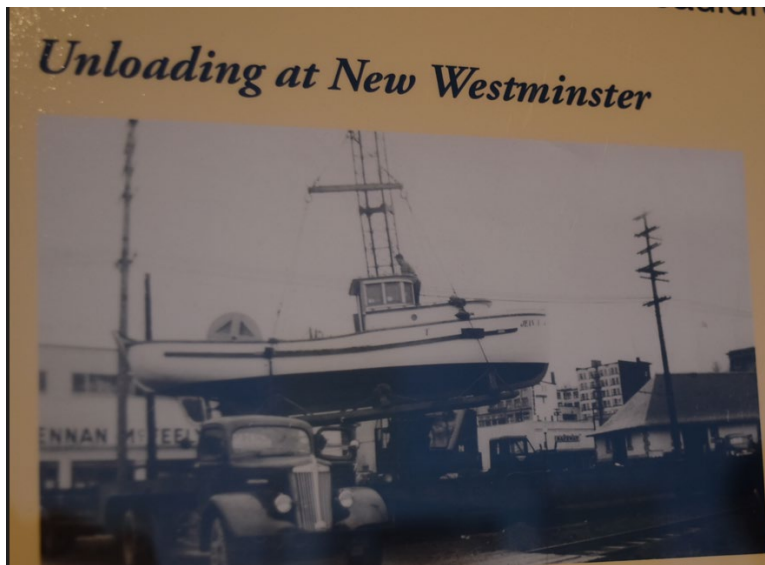


1942年当時に再現された部屋



2階廊下の展示

戦時中に日系人を収容したランガム・ホテルは、戦後 1950 年ごろから 1960 年代半ばまでトミオ・ババが所有して、木製の漁船の造船所として使っていた。木製の小さな漁船は列車で太平洋まで運ばれた。



ウェストミンスターで列車から降ろされるババの漁船

展示には日系人のカスローの思い出が展示してある。その内の幾つかを翻訳する。

ジョー・ミヤザキの思い出

父のシンゾー・ミヤザキはヘルニアだったので道路建設現場には送られなかった。父はランガム・ホテルの掃除を 1942 年 5 月からここから移動するまで続けた。我々一家は私を除いて皆このホテルで暮らした。私はメイズ・ホテルの大部屋で暮らしたが、食事は家族と一緒にとった。父は

暖房のための薪を用意してストーブの世話をした。風呂、料理用の大きなストーブ、暖房用のストーブのために大量の薪を必要とした。給湯用のストーブもあったが、これはおが屑を燃料にしている、いつもおが屑を燃やしていないとすぐにお湯がなくなった。そのうち、2階の真ん中に大きなテーブルとストーブが設置された。私は大工の助手としてホテル中のストーブの周りに柵を作った。蒸気船でカスローに到着してこのホテルに入ってからすぐに、私はホテルの後ろに排泄物用の穴を掘った。3メートル近く掘ったのを覚えている。

ミチコ・コンノの思い出

1942年5月、母と私たち子供7人（8ヶ月から13才まで）は汽車から蒸気船に乗り継いでカスローに到着した。私たち一家は二つに区切られた部屋に入った。真ん中を区切る板の向こうにはタバタ一家が住んだ。タバタさん一家は8人であった。これだけ大勢が寝るので部屋は木製の2段ベッドで一杯で歩く場所もなかった。幸い、2ヶ月後にタバタ一家は他の建物に引越していった。現在の1階の案内係の部屋は日本合同教会清水牧師の事務所だった。現在の劇場は台所だった。台所の後ろに大きな風呂桶があった。母は食事の度に2階の私たちの部屋から1階の台所に降りていってご飯を炊いた。私は台所に行ってこっそりご飯を食べた。台所にはそれぞれの家族が食器を置く棚があった。そのうち2階にも台所が作られた。

1898年10月22日にカナダ太平洋鉄道がネルソンまでバンクーバーから運搬したきて外輪船S・S・モイエ号（S.S.Moyie）をクーテネイ湖に浮かべた。外輪船は1957年まで使用された。この種類の外輪船で現在残っているものでは一番古い。現在、カスローの岸壁で修理中。





カスローの湖岸の公園。

今日はカスローで泊まる予定であったが、ホテル、モテルはどこも一杯なので湖岸を南に 36 キロ走りバルフォー（Balfour）に泊まる。（[目次に戻る](#)）

9月10日（土曜）快晴、朝摂氏6度、午後摂氏26度

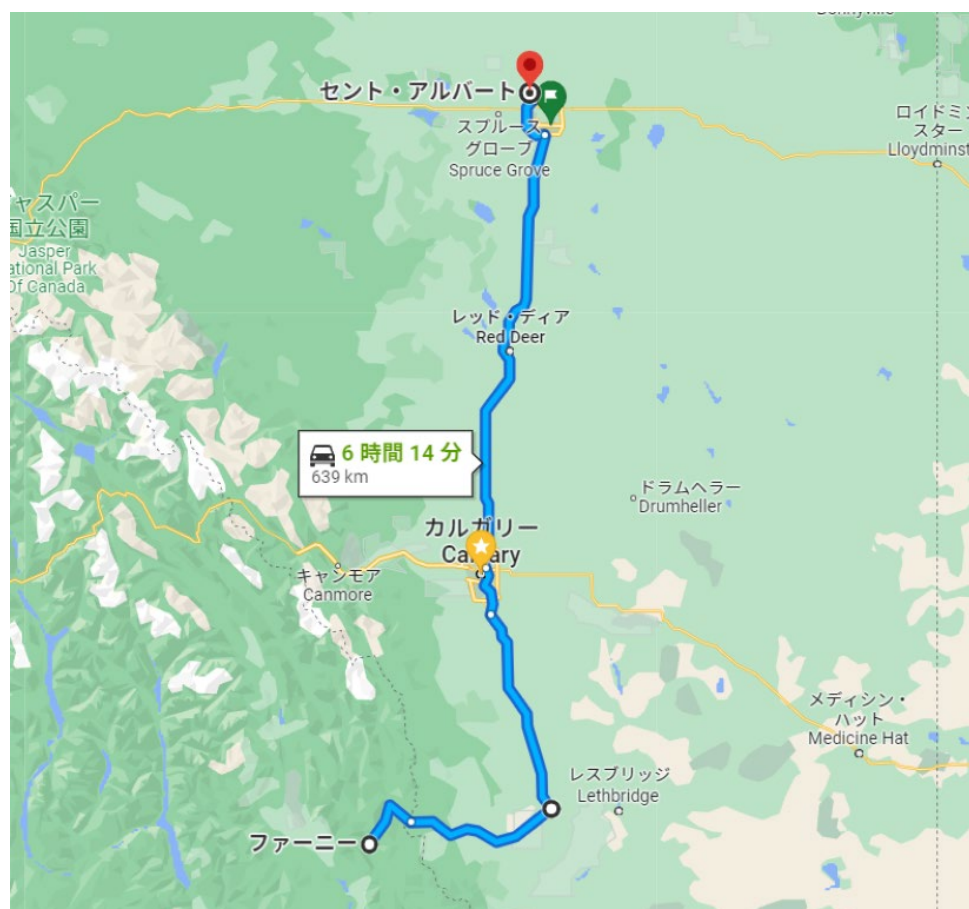
午前中はバルフォーでゆっくりし、昼過ぎからファーニー（Fernie）に向かう。先ずフェリーに45分乗って対岸のクローフォード・ベイ（Crawford Bay）に渡り、ここからクーテネイ湖の東岸を延々と南にクレストン（Creston）までくだり、クレストンからクロウネスト・ハイウェイを東にファーニーに行く。（[目次に戻る](#)）



ファーニーも元は炭鉱の町であったが、現在は観光の町に変身している。近くに良質の雪のスキー場があり、冬はスキー客、夏はゴルフとハイキング客で賑わう。

9月11日（日曜）ファーニーからセント・アルバート

快晴、朝摂氏3度、午後摂氏25度



今日はファーニーからセント・アルバートの自宅まで639キロを走る。山間のハイウェイを西に走り、炭鉱地帯のクロウネスト峠を登るとカナダ大平原の西端に出る。このハイウェイを走る時にいつも不思議に思うのは長い坂道を登って峠を越えると、急に地平線まで平坦なカナダ大平原が始まることである。実はこのあたりのカナダ大平原は海拔が942メートルあり、カナダ大平原は実はカナダ大高原なのである。交代で車を運転して午後に自宅に戻る。

今回の日系人キャンプ遺跡旅行で思ったことは、歴史遺跡を記録しておくことが如何に重要かということである。ニュー・デンバー、サンドン、カスローには博物館があり、日系人の歴史が展示され、現地の白人ボランティアが訪問者に日系人とキャンプの歴史を説明していた。また、スローカン、レモンクリークには歴史標識が建っていて、簡単ではあるが日系人キャンプの説明をしている。多くの場所でこれら日系人の歴史を学んでいる人達は一般カナダ人であった。

[\(目次に戻る\)](#)

参考書

National Association of Japanese Canadians and BC Parks, Japanese Canadian Highway Legacy Sign Project, 1995

Randy Enomoto ed., Honoring Our People: Speaking the Silence (Vancouver, Greater Vancouver Japanese Canadian Citizens' Association, 2019)

Nikkei National Museum & Cultural Centre, 「仮住まい、日系カナダ人強制収容所ガイドブック」
2015